

# 年齢段階別にみた子どもの居場所に関する研究

中島喜代子・松岡 留美

## A Study on the Children's Place from Viewpoint of the Children's Age Group

Kiyoko NAKAJIMA, Rumi MATSUOKA

### 1. 緒言

近年、子どもを取り巻く環境は、生活時間面、居住空間面、人間関係面等において、様々に変化しており、これらは「三間（時間・空間・仲間）の喪失」と言われている。一方、子どもが引き起こす社会問題は深刻な状況であり、その原因の一つとして、子どもの「居場所」の問題が関係していると考えられる。今、子どもの「居場所」について研究することは、こうした社会問題を考えていく上でも重要な事柄であると考えられる。

これまでの子どもの「居場所」に関する研究をみると、1990年代から社会学・教育学・建築学・住居学など幅広い分野で研究されているが、その数はあまり多くない。〈社会学・教育学系〉では、不登校や対人関係など学校問題の解決を中心に、「居場所」を心理面からとらえている研究が多く、〈建築学・住居学系〉は、児童館や青少年センターなどの社会施設の計画などの物理的側面を中心とらえたものがほとんどである<sup>1)</sup>。また、対象とする場所も学校か地域施設に限定されており、子どもの生活環境の一部分しか捉えられていない。しかし、本研究では「居場所」を家庭・学校・地域を通した子どもの生活場面全体を対象とし、とらえる視点も心理面と物理面の両方からとらえて研究してきている<sup>2)</sup>。本研究も同様に、心理面と物理面の両方から「居場所」をとらえ、家庭・学校・地域の子どもたちの生活のすべての場面を対象とする。

本研究では、小学生、中学生、高校生を年齢段階別に比較し、心理的・社会的に自立、発達する段階で居場所がどのように形成され、変化・発展するのかをとらえることを目的とする。

このように、年齢段階による「居場所」の変化、発展をとらえることは、子どもの「居場所」の形成を促進する方策を考える上で重要な意義があると考えられる。

### 2. 調査方法と調査対象の概要

#### (1) 「居場所」の定義と「居場所」の分類<sup>3)</sup>

##### ① 「居場所」の定義

本研究では、「居場所」は他者から認められたり、他者から自由になって自分を取り戻したりして得られるような「自分を確かめる場所」と定義する。

また、人間がもつ重要な要素である「他者との関わり」の視点から、「居場所」を二種類に分類する。一つは、「他者との関わりをもつことで自分を確かめる場所」としての、「社会的居場所」である。もう一つは、「他者との関わりから離れて自分を取り戻せる場所」としての、「個人的居場所」である。

##### ② 「居場所」の分類

「居場所」は物理面・心理面両方を含む概念であるため、物理面を示す「空間支配度」と心理面を示す「他者との関わり」の2軸で構成する分析軸を設定した。その結果、図1のような4類型を得た。なお、「他者との関わり」の視点で分類すると、A・Bが「個人的居場所」、C・Dが「社会的居場所」となる。また、本研究では「個人的居場所」について図2に示す5つの概念に分類し、〈隔離・逃避要求〉の視点から、①②③を心理的に隔離されていれば要求が満たされる低次元の隔離・逃避要求に対応できるもの、④⑤

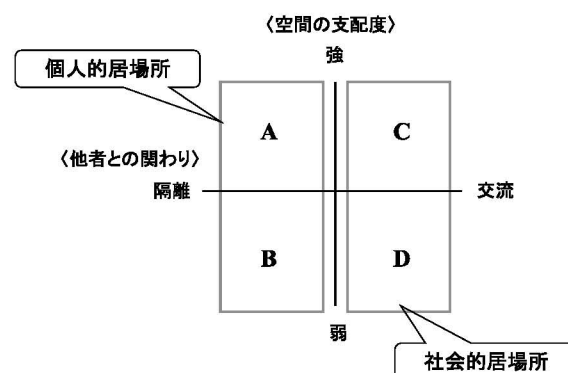


図1 「居場所」の構造図

を心理的にも物理的にも隔離が必要な高次元の隔離・逃避要求に対応できるものとする。「社会的居場所」については、図3に示す4つの概念に分類し、〈交流の仕方〉の視点から、⑥⑦を表面的な交流でも得られる低次元の交流に対応できるもの、⑧⑨を親密な交流によって得られる高次元の交流に対応できるものとする。実際に調査で用いた文言を図2と図3の中に示す。

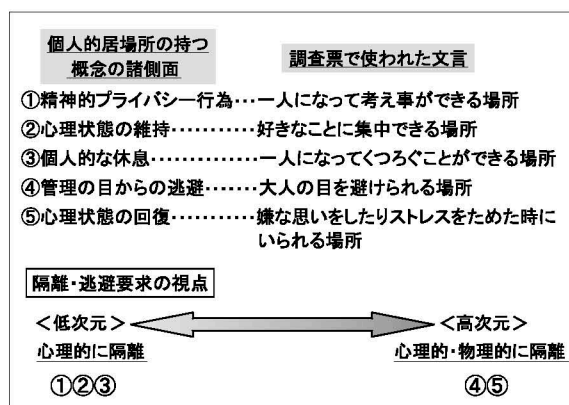


図2 「個人的居場所」の分類

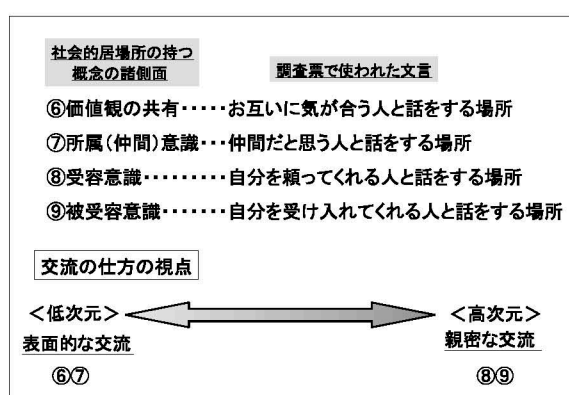


図3 「社会的居場所」の分類

## (2) 調査方法と調査対象の概要

### ① 調査方法

年齢段階別にみた「居場所」の変化・発展をとらえるため、津市内の学校に通う小学5～6年生・中学2年生・高校2年生を対象にし、平成20年6月下旬から7月に学校に配布・回収をしてもらう方法でアンケート調査を行った。調査の結果、1237件の有効サンプルを得た。

### ② 調査対象の概要

調査対象の概要を、表1に示す。

平均人数は、4.5人程度で年齢による違いはみられない。家族形態については、年齢段階が上がるにつれて拡大家族の割合が多くなっている。居住形態については、戸建住宅の居住者は高校生が多く、集合住宅居住者は小・中学生が多い。

表1 調査対象の概要

性 別	小学生		中学生		高校生	
	件数	%	件数	%	件数	%
男	113	48.9	223	46.9	211	41.0
女	118	51.1	252	53.1	304	59.0
無回答	5	—	3	—	8	—
合 計	236	100	478	100	523	100

家族人数	小学生		中学生		高校生	
	件数	%	件数	%	件数	%
1 人	0	0	0	0	1	0.2
2 人	1	0.4	6	1.3	11	2.2
3 人	23	10.1	57	12.6	75	14.9
4 人	114	50.0	188	41.5	196	39.0
5 人	68	29.8	125	27.6	129	25.7
6 人	15	6.6	45	9.9	58	11.6
7 人	6	2.6	18	4.0	24	4.8
8 人	1	0.4	8	1.8	5	1.0
9 人	0	0	2	0.4	2	0.4
10 人	0	0	2	0.4	0	0
11 人	0	0	1	0.2	0	0
13 人	0	0	0	0	1	0.2
20 人	0	0	1	0.2	0	0
無回答	8	—	25	—	21	—
合 計	236	100	478	100	523	100
平均人数	4.4	—	4.6	—	4.5	—

家族形態	小学生		中学生		高校生	
	件数	%	件数	%	件数	%
拡大家族	17	7.5	81	17.8	122	24.4
核 家 族	195	85.5	313	68.8	314	62.8
欠損家族	16	7.0	61	13.4	64	12.8
無 回 答	8	—	23	—	23	—
合 計	236	100	478	100	523	100

居住形態	小学生		中学生		高校生	
	件数	%	件数	%	件数	%
戸建住宅	193	83.9	390	85.3	461	92.4
集合住宅	37	16.1	67	14.7	38	7.6
無 回 答	6	—	21	—	24	—
合 計	236	100	478	100	523	100

居住期間	小学生		中学生		高校生	
	件数	%	件数	%	件数	%
生まれた頃から	84	35.6	188	39.7	245	46.9
小学校入学前から	75	31.8	125	26.4	145	27.8
小学校の頃から	77	32.6	117	24.7	73	14.0
中学生になってから	—	—	44	9.3	34	6.5
高校生になってから	—	—	—	—	25	4.8
無 回 答	0	—	4	—	1	—
合 計	236	100	478	100	523	100

### 3. 調査結果と考察

小・中・高校生の年齢段階別比較を通して、家庭における居場所、学校における居場所、地域における居場所について、検討する。分析に際して、年齢段階による発達類型を用いる。その、年齢段階による発達を5つのパターンに分類したものを表2に示す。

表2 年齢発達段階のパターン分類

発達段階パターン	意 味	小中高
年齢段階一定型	年齢段階による違いはみられない。 例) 小＝中＝高	—
年齢段階順発達型	年齢段階順に発達する傾向がみられる。 例) 小＞中＞高、小＜中＜高	／
中学生段階突出型	中学生に突出して異なる傾向がみられる。 例) 小＝高＞中、小＝高＜中、 小＞高＞中、高＜小＜中など	／ ／
中学生段階発達型	小学生のみ異なる傾向がみられ、中学生と高校生に同じ傾向がみられる。 例) 小＞中＝高、小＜中＝高	／ ／
高校生段階発達型	小学生と中学生に同じ傾向がみられ、高校生のみ異なる傾向がみられる。 例) 小＝中＞高、小＝中＜高	／ ／

#### 1) 年齢段階別にみる調査対象の生活

##### (1) 生活実態

年齢段階別の生活実態についての発達段階パターンを表3に示す。

所有物については、年齢段階が上がるにつれて、子ども部屋は専用化し、テレビや携帯電話も個人意識や必要性が高まるため、専用化する（「年齢段階順発達型」）。また、高校生段階になると、遊ぶことが中心であるテレビゲーム機の興味は弱まり、パソコンは専用化する（「高校生段階発達型」）。

平日の過ごし方については、小学生は学校に残らずに帰宅し、中学生段階になると学校に残ってから帰宅する傾向がみられた。さらに高校生は学校に残ってから地域に寄り道する者も存在する。これは、部活動の参加状況や行動範囲の広がり関係していると考えられる。

休日の過ごし方については、小学生は休日を家庭や地域で友達と過ごし、人との関わりが強い。中学生は部活動をしている者が多いため、学校で過ごし、学校のウエイトが大きい。高校生は、家庭では一人で過ごし、学校では部活動をして過ごしている者が多い。

問題行動の経験については、中学生はいじめた経験がある者が多く、また、低年齢段階であるほど、いじめられた経験がある者が多い。一方、年齢段階が上が

表3 生活実態

項 目	内 容	発達段階パターン	小中高
所 有 物	専用部屋 テレビ 携帯電話	年齢段階順発達型	／ ／ ／
	パソコン ゲーム機	高校生段階発達型	／ ／
平日の行動	学校残→寄道→帰宅	年齢段階順発達型	／
	授業終了後→帰宅 学校残→帰宅 寄道→帰宅	中学生段階突出型	／ ／ ／
休 日 の 過 ぎ 方	家庭	中学生段階突出型	／
	学校	(小学生非該当)	／
	地域	中学生段階発達型	／
問題行動の 経 験	いじめる	中学生段階突出型	／
	いじめられる 自殺したい 不登校	年齢段階順発達型	／ ／ ／
	保健室登校	年齢段階一定型	—
大切にしていること	家族と過ごす	年齢段階順発達型	／
	友達と過ごす	中学生段階発達型	／
	趣味 習い事	年齢段階順発達型	／ ／
大切な人	親やきょうだい	年齢段階順発達型	／
	学校の友達	中学生段階発達型	／
	その他	高校生段階発達型	／

るにつれて、自殺願望や不登校といった深刻な問題を抱えている者が多くなる（「年齢段階順発達型」）。

最も大切にしていることについては、低年齢段階であるほど、家族と過ごすことを大切にしており、中学生段階になると、家族より友達と過ごすことを大切にしている。また、年齢段階が上がるにつれて、個人生活のウエイトが大きく、充実してくるため、趣味や習い事といった自分の熱中しているものを大切にしている（「年齢段階順発達型」）。

最も大切な人については、低年齢段階であるほど、大切な人は家族であり、中学生段階になると、大切な人は学校の友達である者が多くなる。また、高校生段階になると、行動範囲や交友範囲の広がりから恋人や一人に決められないといった者も多くなる。

## (2) 生活意識と性格

年齢段階別の生活意識と性格についての発達段階パターンを表4に示す。

家庭・学校・地域のうち最も居心地の良さを感じる場所について、生活の拠点である家庭に最も居心地の良さを感じている。中学生段階になると部活動をし始め、学校で過ごす時間も多くなるため、学校にも居心地の良さを感じる者が多くなる。一方、地域に居心地の良さを感じる者は少なく、地域における居場所所有の環境は十分でないと考えられる。また、家庭・学校・地域のどこにも居心地の良さを感じていない者が約1割も存在することが明らかとなった。

嫌だと思う行動や状況については、年齢段階が上がるにつれて、授業や宿題を嫌だと思っている者が多くなる。小学生は嫌だと思うことが特になく、中学生は最も嫌だと思っていることが多い。特に中学生は人間関係や自分自身のことの両面について多くの悩みや不安を抱えていることが明らかになった（「中学生段階突出型」）。

性格については、年齢段階が上がるにつれて、人間関係や考え方が複雑になり、性格に対する認識も変わるため、外向的な性格、プラス思考、協調性がある者が少なくなる傾向があることが明らかになった（「年齢段階順発達型」）。

表4 生活意識と性格

項 目	内 容	発達段階パターン	小中高
居心地の良さを 感じる場所	地域 特になし	年齢段階 一定型	—
	家庭 学校	中学生段階 発達型	／
嫌だと思う 行動や状況	塾・習い事 卒業後の進路 家族との関係 特になし	中学生段階 突出型	／
	授業・宿題	年齢段階順 発達型	／
性 格	人と話をするのが好き 物事を気楽に考える 協調性がある	年齢段階順 発達型	／

## 2) 年齢段階からみる家庭における子どもの居場所

## (1) 家庭における子どもの生活実態

年齢段階別の家庭における生活実態についての発達段階パターンを表5に示す。

## ① 家庭における雰囲気

家庭における雰囲気を「家族の仲は良く、家庭の雰囲気は良い」「家族の仲はあまり良くなく、家庭の雰囲気はあまり良くない」の選択肢で調査した。

表5 家庭における生活実態

項 目	内 容	発達段階パターン	小中高
雰 囲 気	仲が良く、雰囲気も良い	中学生段階 突出型	／
過 ぎ し 方	寝る時だけしか家にいない	年齢段階 一定型	—
	自分の部屋 居間・食事室 自分の部屋と居間・食事室	年齢段階 順型	／
過ごす相手	友達を家によんで遊ぶ 友達に電話したり、メールしたりして過ごす	中学生段階 発達型	／
	家族と一緒に過ごす 家では誰とも関わらない		／
大切にしている場所	居間・食事室	年齢段階順型	／
	自分の部屋	年齢段階順型	／
人 間 関 係	父と本音で会話する	年齢段階 一定型	—
	両親と本音で会話する 母と本音で会話する 両親と本音で会話しない	中学生段階 突出型	／

全体的に、約9割の者が家庭の雰囲気は良いと感じている。

年齢段階別に比較すると、中学生が家庭の雰囲気をあまり良くないと感じている者が多い。

## ② 家庭における過ごし方

家庭での過ごし方を、「ほとんど自分の部屋」「ほとんど居間・食事室」「自分の部屋と居間・食事室は半ずつ」「寝るときだけしか家にいない」の選択肢で調査した。

全体的に、居間・食事室など家族の共有空間で過ごす者と個室と共有空間を同程度使用することが多い傾向がみられる。

年齢段階別に比較すると、年齢が上がるにつれて、居間・食事室のような家族の共用空間で過ごすより、自分の部屋のような私的空間で過ごす者が増えることが明らかになった（「年齢段階順発達型」）。

## ③ 家庭における過ごす相手

家庭において過ごすことが多い相手を、「友達と家で」「友達と電話やメールで」「家族と」「家ではほとんど誰とも関わらない」の選択肢で調査した。

全体的に、家庭では6割の者が家族と一緒に過しており、友達とは電話やメールを使って間接的に関わっている者が約2割で、家で直接対応する場合の倍以上で多い。また、誰とも関わらない者が約1割存在する。

年齢段階別に比較すると、低年齢段階である程、家族と過したり、友達と直接的に関わる者が多く、年齢段階が上がるにつれて、家族と離れ、電話やメールなどで友達と間接的に関わる者や誰とも関わらない

ものが増えることが明らかになった。

#### ④ 家庭における大切にしている場所

全体的に、私的空間である自分の部屋や家族との共用空間である居間・食事室・台所を大切にしていることが明らかになった。

年齢段階別に比較すると、年齢段階が上がるにつれて、比較的自由に使える自分の部屋のような私的な空間を大切にようになる。また、低年齢段階である程、家族と交流することが中心である居間・食事室・台所のような公的な空間を大切にすることが明らかになった。

#### ⑤ 家庭における人間関係

全体的に、親との関係について、両親とは本音で話し合っているが、父親と母親では、母親の方が本音で話し合っている。また、両親とは本音で話し合わない者も存在することが明らかになった。

年齢段階別に比較すると、中学生は両親との関係が悪く、小学生は両親との関係が良い。きょうだいとの関係では、きょうだいとは本音で話し合っており、年齢比較では、大きな違いはみられなかった。

#### ⑥ 家庭における心理状態

年齢段階別の家庭における「安心感（安心できる）」「安定感（落ち着ける）」「快楽感（楽しい）」「満足感（満足感がある）」「解放感（自由にできる）」「好感（家庭が好き）」の心理状態について、図4に示す。

全体的に、家庭における心理状態は比較的良好く、特に家庭は楽しい場所、満足感がある場所というより、安らぐ場所、落ち着く場所であるといえる。

年齢段階別に比較すると、中学生は家庭が安らいだり、落ち着いたりする場所になっている者が少なく、そういった心理状態が家庭が好きとはいえない中学生を多くしていると考えられる。また、年齢段階が上がるにつれて、あるいは中学生段階になると、家庭では楽しい、満足感があると感じなくなる。解放感については、年齢段階が上がるにつれて、自立度が高まり、親や保護者の管理が弱くなるため、自由にできると感じていることが明らかになった。

#### ⑦ 家庭における居心地が良いと感じる時

年齢段階別の家庭における居心地が良いと感じる時について、図5に示す。

全体的に、人と交流している時より、一人である時に居心地が良いと感じている。また、家族と友達では、家族といる時の方が居心地の良さを感じている者が多い。

年齢段階別に比較すると、年齢段階が上がるにつれて、一人である時に居心地の良さを感じ、低年齢段階である程、人と交流している時に居心地の良さを感じることが明らかになった。

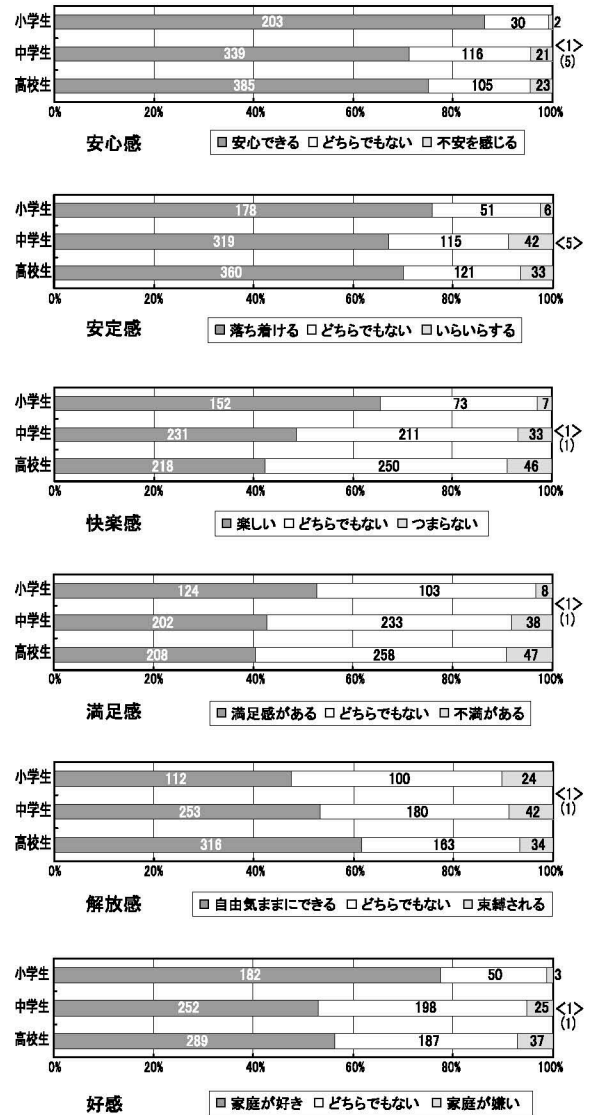


図4 家庭における心理状態

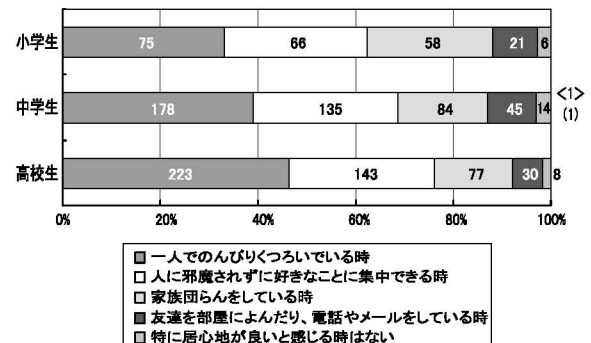


図5 家庭における居心地の良さを感じる時

## (2) 家庭における子どもの居場所

### ① 家庭における居場所の実態

家庭における居場所の実態を、各室の使用目的、居場所の所有率、居場所となる具体的な場所、社会的居場所の相手について図6～10に示し、これを検討する。

#### a. 家庭における各室の使用目的（図6，図7）

全体的に、自分の部屋では一人で過ごし、居間では家族と過ごし、また、友達とは居間・食事室より家族が入ってこない自分の部屋で過ごす者が多い。

年齢段階別に比較すると、年齢段階が上がるにつれて自分の部屋で一人で過ごし、低年齢段階であるほど家族と過ごすことがとらえられた。中学生段階になると、居間・食事室は家族と過ごすことの他に一人で過ごすことが多くなり、家庭は個人的居場所としての側面が強くなることが明らかになった。また、年齢段階が上がるにつれて、居間・食事室を友達と過ごすために使用しなくなる傾向がみられた。さらに、高校生段階になると、自分の部屋を寝るためだけにしか使用しない者や居間・食事室を使用しない者が多くなること

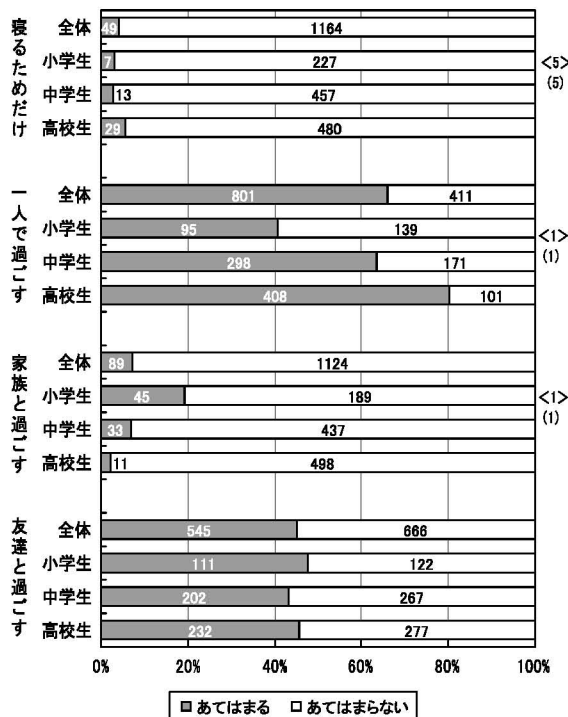
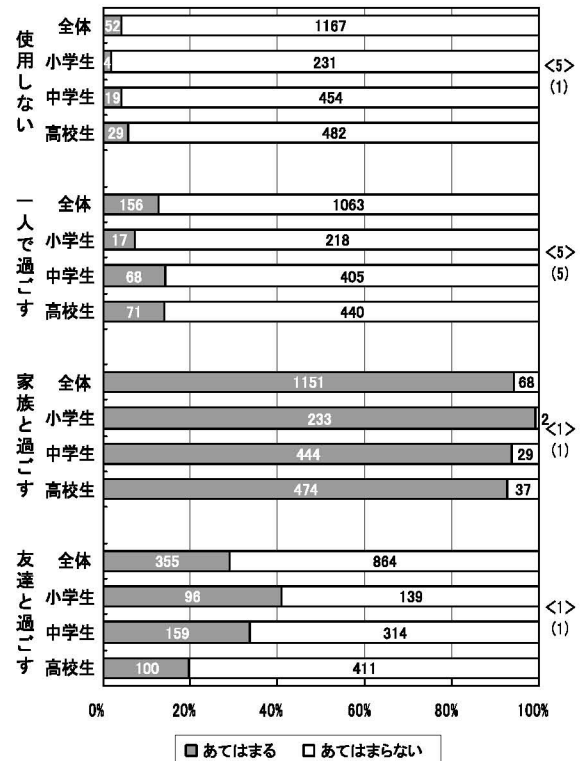


図6 自分の部屋の使用目的



\* グラフ内数値は件数を示す

\* <1>は、カイニ乗検定の有意水準1%を示す  
 \* <5>は、カイニ乗検定の有意水準5%を示す  
 \* <10>は、カイニ乗検定の有意水準10%を示す  
 \* (1)は、順位相関係数の有意水準1%を示す  
 \* (5)は、順位相関係数の有意水準5%を示す  
 \* (10)は、順位相関係数の有意水準10%を示す

図7 居間の使用目的

#### b. 居場所の所有率（図8）

全体的に、ほとんどの者が家庭で個人的居場所も社会的居場所も所有しており、個人的居場所・社会的居場所ともに高次元の居場所よりも低次元の居場所の方が所有率が高い。また、個人的居場所より社会的居場所の所有率が低いことが明らかになった。

年齢段階別に比較すると、高校生段階になると、家庭において所有することが難しい高次元の個人的居場所を所有している。特に、「④大人の目を避けられる場所」に関しては、低年齢段階である程少なく、まだ親の管理の下にある者が多いことが所有率の低さに影響していると考えられる。また、「⑤嫌な思いをしたり、ストレスをためた時にいられる場所」に関しては中学生で少なく、前述したように中学生は家庭での心理状態が悪い傾向にあるが、心理状態を回復する場所も家庭に所有できていない。社会的居場所については、「⑥お互いに気が合う人と話をする場所」、「⑧自分を頼ってくれる人と話をする場所」に関して、小学生は社会的居場所の相手が家族中心となる家庭において、家族と過ごし、また関係も良いことから、社会的居場所を所有しやすい。一方、年齢段階が上がるにつれて、

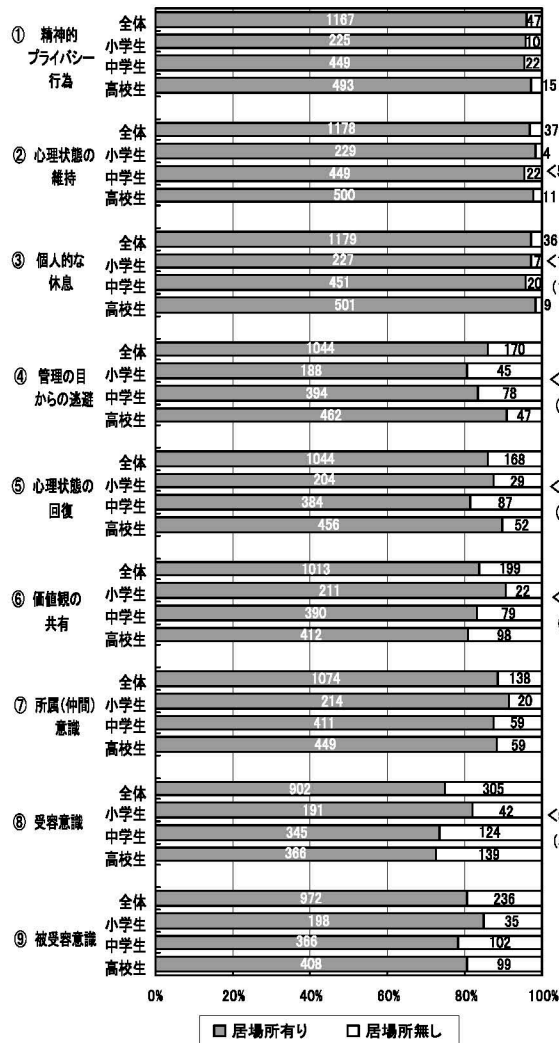


図8 家庭における居場所の所有率

あるいは中学生段階になると、気が合ったり、自分を頼ってくれたりという行為の相手が友達となり、社会的居場所の相手が家族中心となる家庭では居場所を所有しにくくなることが明らかになった。

#### c. 居場所となる具体的な場所 (図9)

全体的に、個人的居場所について、私的空間である自分の専用部屋が居場所の中心であり、子ども部屋以外の場所では、完全に一人にならなくてもできる行為は開放空間である居間・食事室、より完全な逃避や隔離を求める行為は閉鎖空間であるトイレ・風呂が個人的居場所になることが明らかになった。

社会的居場所については、公的空間であり、交流が中心となる居間・食事室が最も多く、次いで私的空間である自分の専用部屋を社会的居場所としている。こ

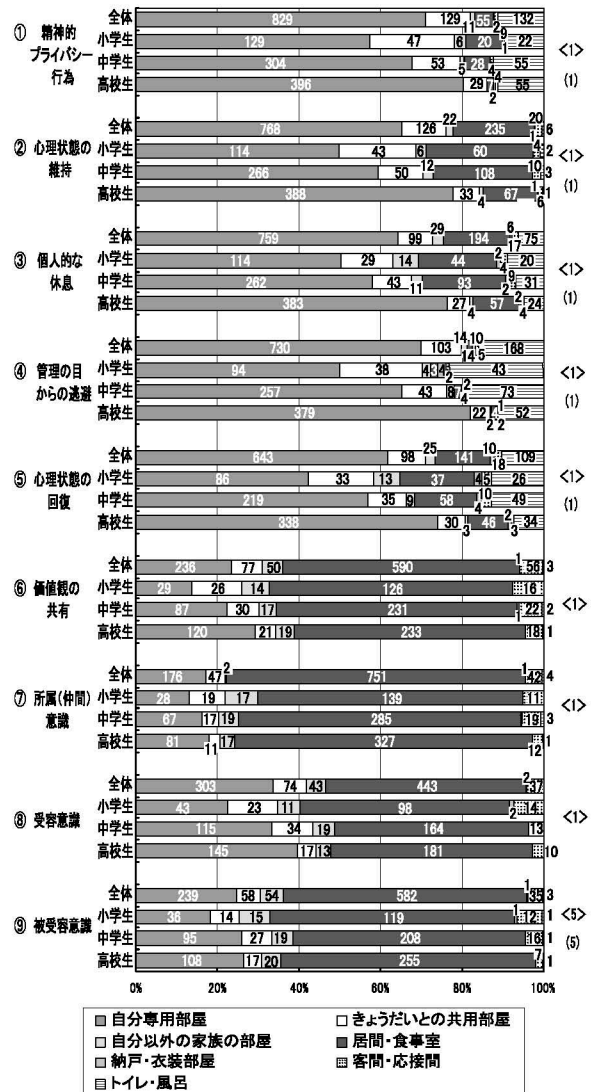


図9 家庭における居場所となる具体的な場所

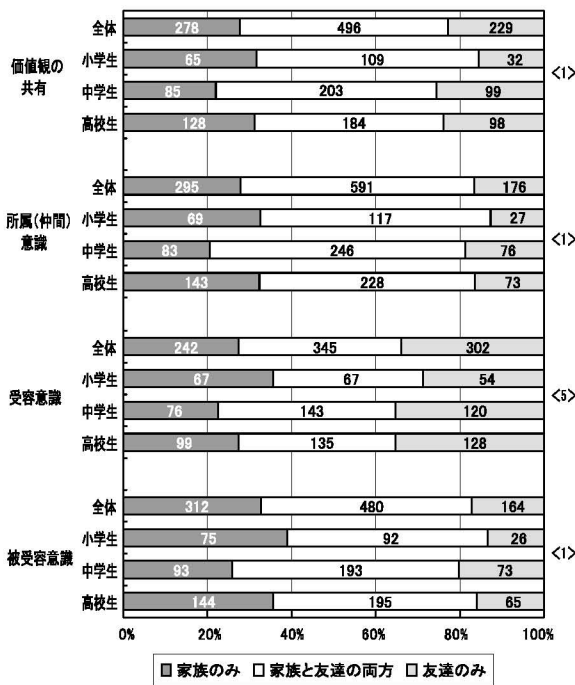
れは、社会的居場所の相手が居間・食事室では家族中心、自分の専用部屋では友達中心であることから、相手により場所が異なると考えられる。

年齢段階別に比較すると、個人的居場所について、年齢段階が上がるにつれて、自分の専用部屋が居場所となり、低年齢段階である程、きょうだいとの共用部屋や居間・食事室、トイレ・風呂が居場所となっている。これは、低年齢段階では共用部屋所有率が高いことや居間・食事室といった公的空間であっても個人的居場所になり得ること、また、完全に一人になりやすいトイレ・風呂といった閉鎖空間が居場所となることによると考えられる。社会的居場所について、年齢段階が上がるにつれて、あるいは中学生段階になると、

私的空間である自分の専用部屋を居場所としている。これは、社会的居場所の相手が友達となることが関係していると考えられる。また、社会的居場所の中心である居間・食事室はそれぞれの行為目的によって社会的居場所の相手が異なるため、居場所となるかどうか異なる。高校生段階になると、自分の考えや主張が生まれ、居間・食事室での社会的居場所の相手となる家族と違った考え方を持つようになる者もいるため、居間・食事室は「⑥お互いに気が合う人と話をする場所」となりにくいと考えられる。また、中学生は自分を頼ってくれる人は家族よりも友達であるため、家族との交流場所である居間・食事室は「⑧自分を頼ってくれる人と話をする場所」となりにくいと考えられる。「⑨自分を受け入れてくれる人と話をする場所」では、年齢段階に関わらず、社会的居場所の中心である居間・食事室を居場所としている者が多い。

#### d. 家庭における社会的居場所の相手 (図10)

全体的に、家庭での交流相手は、家族と友達の両方であり、また、「⑥お互いに気が合う人と話をする場所」「⑦仲間だと思ふ人と話をする場所」「⑨自分を受け入れてくれる人と話をする場所」の相手は、家族が占める割合が高く、「⑧自分を頼ってくれる人と話を



\* グラフ内数値は件数を示す

\* <1>は、カイニ乗検定の有意水準1%を示す  
 \* <5>は、カイニ乗検定の有意水準5%を示す  
 \* <10>は、カイニ乗検定の有意水準10%を示す  
 \* (1)は、順位相関係数の有意水準1%を示す  
 \* (5)は、順位相関係数の有意水準5%を示す  
 \* (10)は、順位相関係数の有意水準10%を示す

図10 家庭における社会的居場所の相手

する場所」は、友達が占める割合が高くなる傾向がみられた。

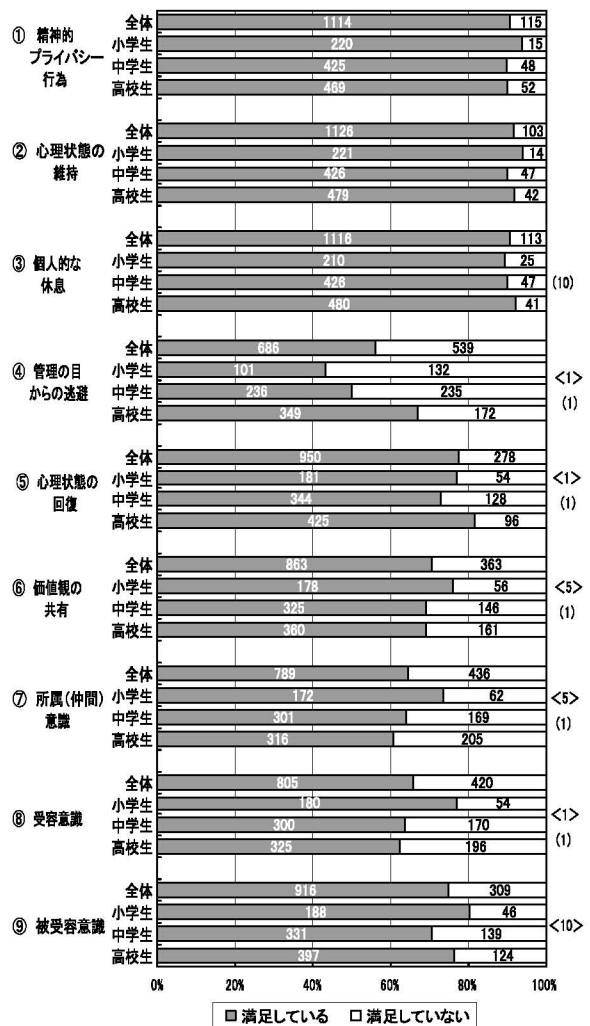
年齢段階別に比較すると、家族との関係が悪く、友達との関係が強まる中学生は、家庭での交流相手は、「⑨自分を受け入れてくれる相手と話をする場所」以外は、家族より友達が占める割合の方が高くなることが明らかになった。

#### ② 家庭における居場所に対する評価と要求

家庭における居場所についての評価と要求を図11と図12に示し、これを検討する。また、所有率と評価、要求の関係を、図13と図14に示す。

##### a. 家庭における居場所に対する評価 (図11)

全体的に、多くの子どもが家庭における個人的居場所にも社会的居場所にも満足している。個人的居場所については、低次元の居場所に対する評価は良いが、



\* グラフ内数値は件数を示す

\* <1>は、カイニ乗検定の有意水準1%を示す  
 \* <5>は、カイニ乗検定の有意水準5%を示す  
 \* <10>は、カイニ乗検定の有意水準10%を示す  
 \* (1)は、順位相関係数の有意水準1%を示す  
 \* (5)は、順位相関係数の有意水準5%を示す  
 \* (10)は、順位相関係数の有意水準10%を示す

図11 家庭における居場所に対する評価

高次元の居場所に対する評価は低次元の居場所より悪い。

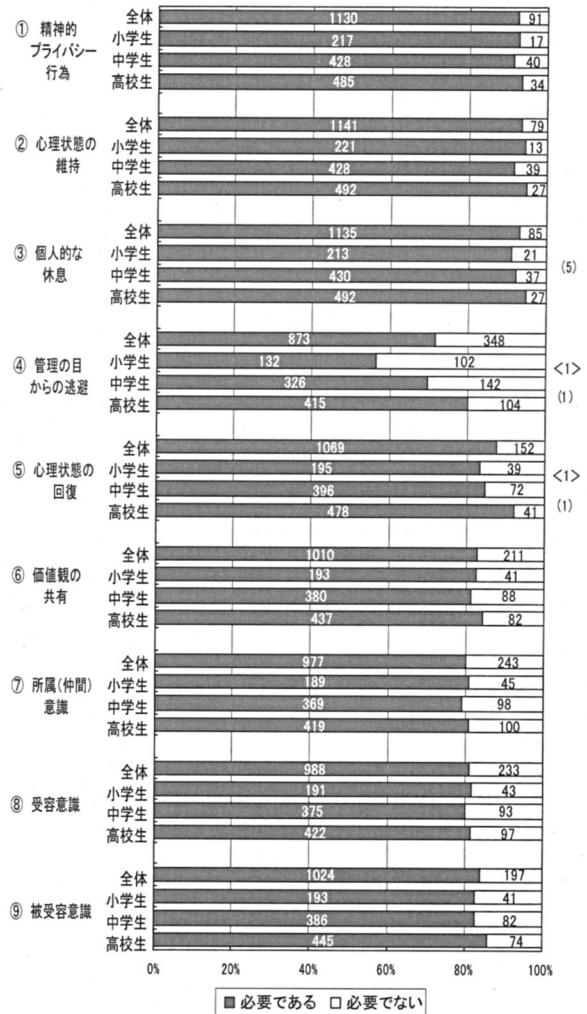
年齢段階別に比較すると、個人的居場所については、低次元の居場所に対する評価には大きな違いはみられなかったが、「④大人の目を避けられる場所」に関しては、低年齢段階である程評価が悪くなる。これは、この居場所の所有率と関連しているとともに、親の監視の目の強さによると考えられる。「⑤嫌な思いをしたり、ストレスをためたときにいられる場所」に関しては、中学生段階で突出して評価が悪くなっている。これは、前述したように、中学生は悩みを多く抱えており心理状態も悪いこととともに、この居場所の所有率が相対的に低いことによっていると考えられる。

社会的居場所については、すべての居場所について小学生の評価が最も良く、「⑥互いに気が合う人と話をする場所」「⑧自分を頼ってくれる人と話をする場所」に関しては、中学生段階になると評価が悪くなり、「⑦仲間だと思ふ人と話をする場所」に関しては、年齢段階が上がるに従って評価が悪くなっている。これは、家庭での社会的居場所の相手は家族中心であり、家族との関係が強い小学生では評価が高くなっていると考えられる。中学生段階になると、友達との関係が強くなるとともに家族との関係は弱くなり、また、年齢段階が上がるに従って、家庭では一人で過ごすことが多くなるため、評価が低くなっていると考えられる。また、「⑨自分を受け入れてくれる人と話をする場所」に関しては、中学生で突出して評価が低く、家族関係が良好でないことを示していると考えられる。

#### b. 家庭における居場所に対する要求 (図 12)

全体的に、個人的居場所については、低次元の居場所に対する要求は高く、高次元の居場所に対する要求は低次元のものより低い。特に、「④大人の目を避けられる場所」に対する要求は、すべての要求の中で最も低い。社会的居場所については、個人的居場所より要求はやや低い、多くの子どもは家庭において、個人的居場所も社会的居場所も必要としているといえる。

年齢段階別に比較すると、「③一人になってくつろぐことができる場所」と「⑤嫌な思いをしたり、ストレスをためたときにいられる場所」に関しては、高校生段階になると、居場所に対する要求が高くなり、「④大人の目を避けられる場所」に関しては、年齢段階が上がるにしたがって、居場所に対する要求が高くなることになった。高校生は特に家庭に高次元の個人的居場所を求める傾向が強い。



\* グラフ内数値は件数を示す

\* <1>は、カイニ乗検定の有意水準1%を示す  
 \* <5>は、カイニ乗検定の有意水準5%を示す  
 \* <10>は、カイニ乗検定の有意水準10%を示す  
 \* (1)は、順位相関係数の有意水準1%を示す  
 \* (5)は、順位相関係数の有意水準5%を示す  
 \* (10)は、順位相関係数の有意水準10%を示す

図12 家庭における居場所に対する要求

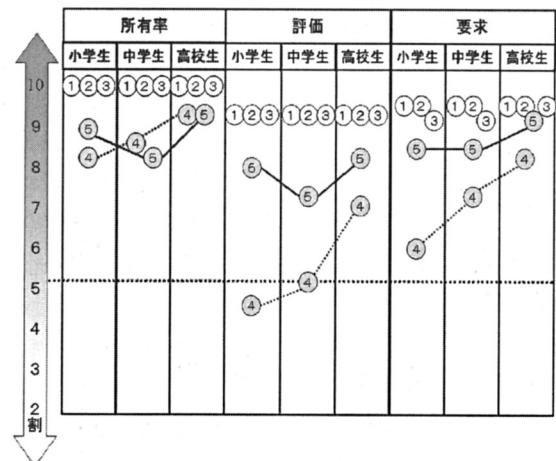


図13 家庭における個人的居場所の所有率、評価、要求

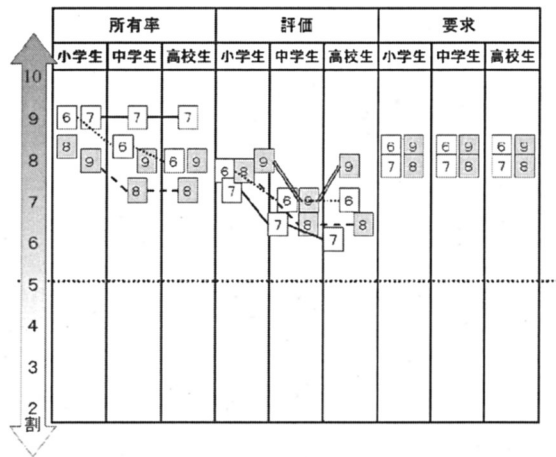


図14 家庭における社会的居場所の所有率、評価、要求

### 3) 年齢段階からみる学校における子どもの居場所

#### (1) 学校における子どもの生活実態

学校における生活実態についての発達段階パターンを表6に示す。

##### ① クラスの雰囲気

ほとんどの子どもがクラスの雰囲気は良いと感じている。しかし、中学生はクラスの雰囲気をあまり良くないと感じている者が多い。

##### ② 部活動の参加状況

この項目は、小学生は非該当である。中・高校生のほとんどが部活動に参加しており、その中で文化部より運動部に所属しているものが多い。特に、中学生はほとんどのものが運動部に所属している。

##### ③ 生徒会・委員会活動の参加状況

この項目は、小学生は非該当である。生徒会・委員会活動をしているものは、半数以下と少ない。中学生は、過半数のものが生徒会・委員会活動をしており、高校生は少ない。

##### ④ 学校における放課後の過ごし方

学校における放課後の過ごし方を「生徒会活動をする」「勉強をしたり読書をしたりする」「友達や先生としゃべったりする」「部活動をする」「何もせずに帰る」の選択肢で調査した。

全体的に、放課後は一人ではなく、部活動をしたり、友達や先生など誰かと過ごしたりするか、なにもせず帰宅するかのどちらかである。

年齢段階別に比較すると、部活動が強制的である中学生は放課後に部活動をしており、放課後に部活動がない小学生は友達や先生と一緒に過ごすか何もせずに帰ることが多い。また、高校生は部活動をしたり、誰かと一緒に過ごしたり、何もせずに帰ったりと多様な過ごし方をしている。

表6 学校における生活実態

項目	内 容	発達段階パターン	小中高
雰 囲 気	仲が良く、雰囲気も良い		／
放 課 後 の 過 ぎ し 方	友達や先生と過ごす 部活動をする 何もせずに帰る	中学生段階 突出型	／ ／ ／
大切に して いる 場 所	特になし		／
	自分のクラス 部室・委員会の場	高校生段階 発達型	／
	自分の席	年齢段階順 発達型	／
	グラウンド	中学生段階 発達型	／
部 活 動 の 参 加 状 況	運動部 文化部 運動部・文化部両方	小学生 非該当	／ ／ ／
生徒会・委員会 活動の参加状況	参加している		／
人 間 関 係	本音で話し合える先生がいる	年齢段階順 発達型	／

##### ⑤ 学校において大切にしている場所

全体的には、多くのものが自分のクラスを大切にしているが、次いで大切にしている場所がないとするものが2割であり、そのほかの場所は1割未満であった。

年齢段階別に比較すると、高校生段階になると、自分のクラスや部室・委員会の場を大切にしているものが多く、低年齢段階程、自分の席といった狭い空間を大切にしている。また、中学生は大切にしている場所がないとするものが多い。

##### ⑥ 学校における人間関係

全体的には、半数以上のものが、本音で話し合える先生がいない。

年齢段階別に比較すると、低年齢段階である程、本音で話し合える先生が存在する。

学校の友達との関係については、ほとんどの者が本音で話し合える友達があり、異年齢の友達との縦のつながりより、同年齢の友達との横のつながりが強いことが明らかになった。年齢段階別比較では、大きな違いはみられなかった。

##### ⑦ 学校における心理状態

学校における心理状態を、図15に示す。

全体的には、学校は「安らぐ」「落ち着く」「満足できる」「自由にできる」場所というより、「楽しい」場所、「学校が好き」という者が多い傾向がみられる。

年齢段階別に比較すると、低年齢段階である程、「安らぐ」「楽しい」と感じている。また、小学生は学校が好きという者が多い。

## 年齢段階別にみた子どもの居場所に関する研究

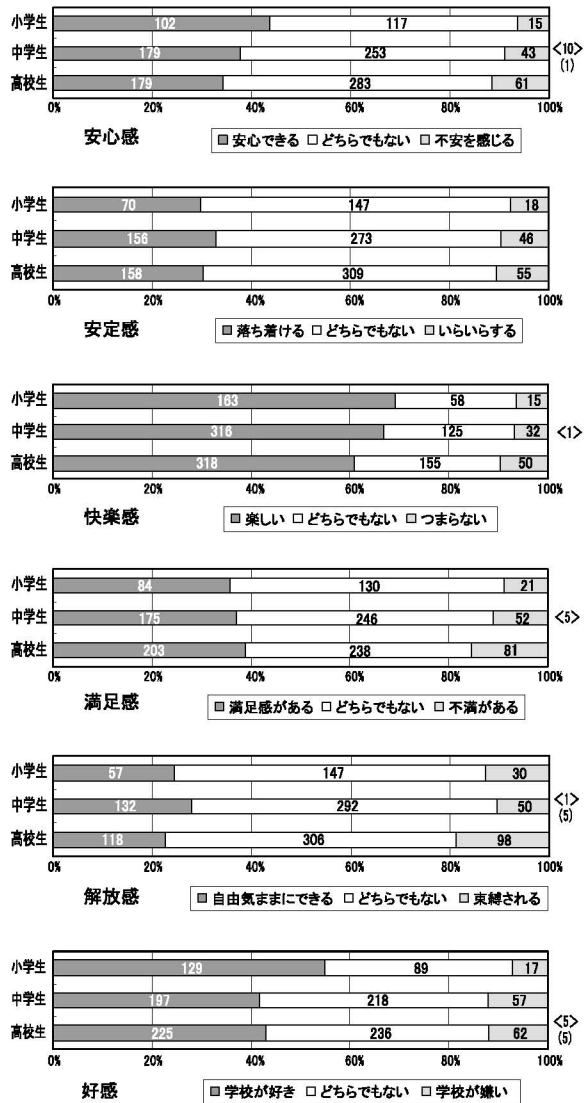


図15 学校における心理状態

### (2) 学校における子どもの居場所

#### ① 学校における居場所の実態

学校における居場所の実態を、部屋の使用目的、居場所の所有率、居場所となる具体的な場所、社会的居場所の相手について図16～21に示し、これを検討する。

##### a. 学校における各部屋の使用目的 (図16～18)

全体的に、自分のクラスについては、過半数の者が授業や学級会以外にも使用しており、中でも一人より友達と使用しているものが多い。

年齢段階別に比較すると、年齢段階が上がるにつれて、授業や学級会のためだけに使用する者は少なくなり、自分のクラスの使用目的が多様化するといえる。また、中学生段階になると、友達と過ごすことが多くなることが明らかになった。

部室 (小学生非該当) については、全体的にほとんどの部活動において部室があり、部活をするためだけ

にしか使用しない者が半数で、部活以外にも部室を使用しており、中でも一人より友達と使用しているものが多い。

年齢段階別に比較すると、高校生の方が部室を自由に使用している。

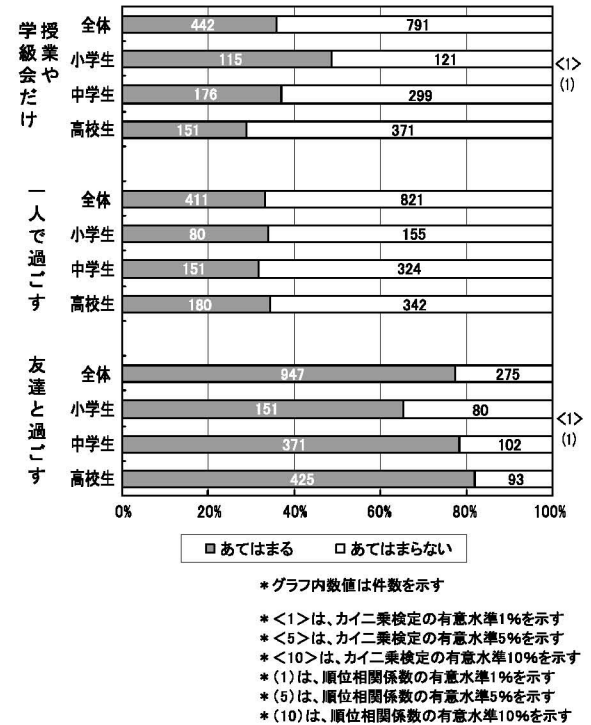


図16 自分のクラスの使用目的

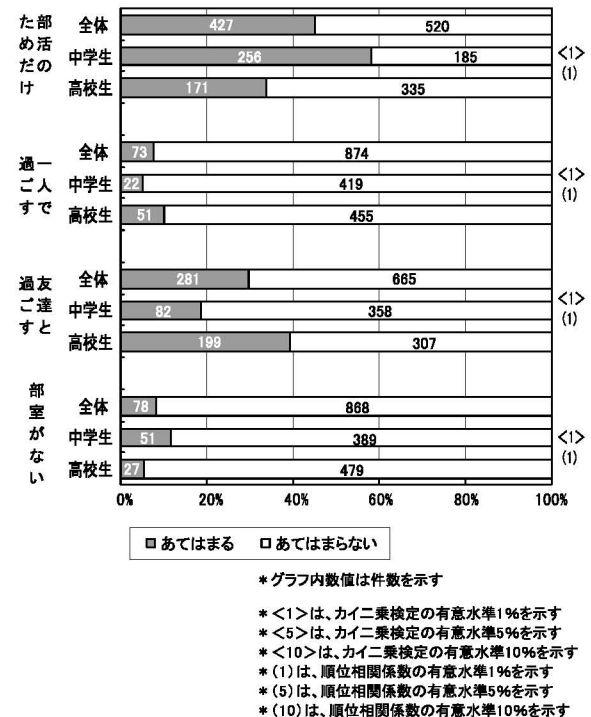


図17 部室の使用目的

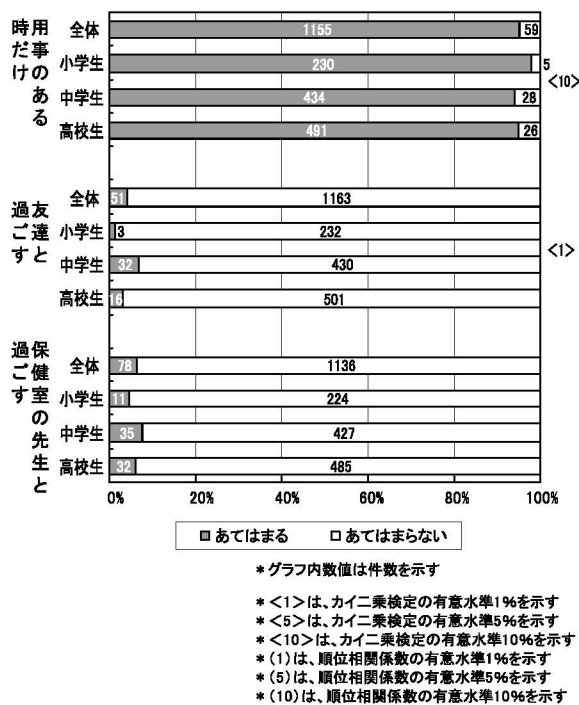


図18 保健室の使用目的

保健室については、あまり活用されておらず、居場所にはなっていない。

年齢段階別に比較すると、中学生段階になると、用事のない時にも保健室を使用する者が増え、中でも中学生は友達と過ごすために使用しており、保健室を居場所として活用する者が存在していることが明らかになった。

#### b. 学校における居場所の所有率（図19）

全体的に、個人的居場所については、「②好きなことに集中できる場所」のみ所有率が高いが、その他の居場所の所有率はやや少なく、学校において個人的居場所を所有することはやや難しいといえる。社会的居場所については、ほとんどの者が所有しているが、高次元の居場所は低次元の居場所より所有率が低く、やや所有しにくいことが明らかになった。

年齢段階別に比較すると、個人的居場所については、年齢段階が上がるにつれて、学校のような多くの人がいる環境では、一人になることが難しく、所有率が低い。社会的居場所については、低次元の居場所では違いはみられなかったが、高次元の居場所では、年齢段階が上がるにつれて、部活動をするなど、人間関係が広く、深くなるため、学校に社会的居場所を所有できるようになることが明らかになった。

#### c. 学校における居場所となる具体的な場所（図20）

全体的に、自分のクラスを居場所としている者が最も多いが、高次元の個人的居場所については自分のクラスを居場所としている者が少なくなり、特に大人の

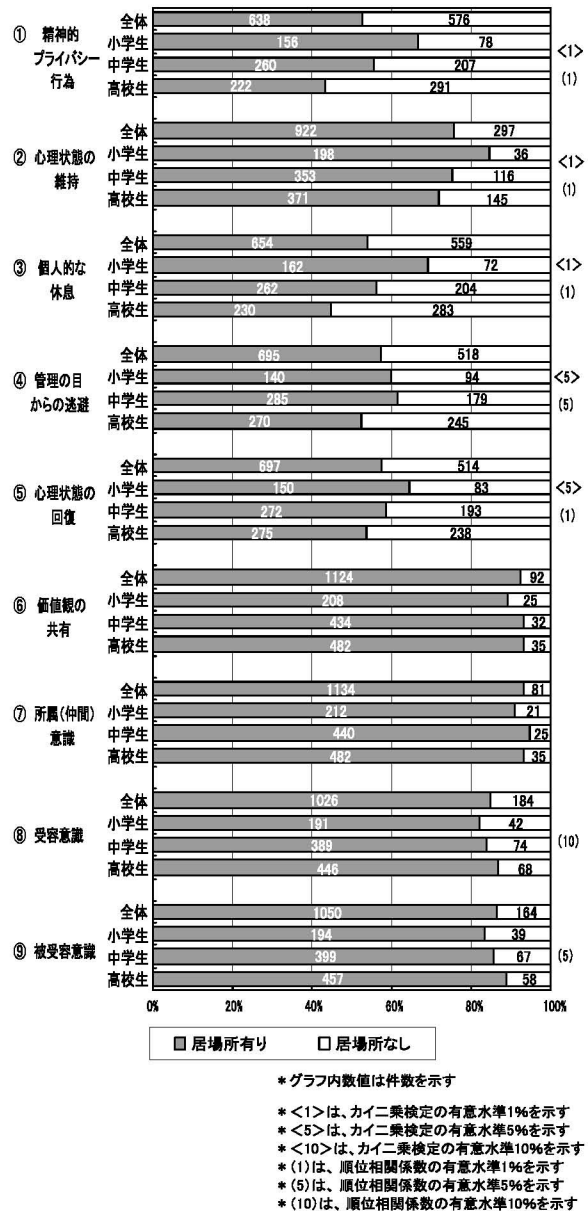


図19 学校における居場所の所有率

目を避けられる場所は保健室・相談室が最も多い。これは、高次元の個人的居場所は自分のクラス以外に物理的に隔離・逃避ができる場所を求めているのではないかと考えられる。また、個人的居場所については廊下・階段・校庭の片隅・トイレといった公共空間の片隅を居場所としている者が多く、社会的居場所については保健室・相談室や部室・委員会の場合、他のクラスといった自分の友達がいる場所を居場所としている者が多い。

年齢段階別に比較すると、個人的居場所については、「②好きなことに集中できる場所」や「③一人になってくつろぐことができる場所」で自分のクラスを居場所としている者は、低年齢段階である程、多い傾向がみられた。すなわち、「②好きなことに集中できる場

所」や「③一人になってくつろぐことができる場所」では、低年齢段階の者は、自分のクラスが居場所となるが、高年齢段階の者は、多くの人がいるような自分のクラスよりも、より隔離・逃避ができる部室・委員会の場合や廊下・階段・校庭の片隅・トイレが居場所となることが明らかになった。また、「④大人の目を避けられる場所」は、低年齢段階の者は保健室・相談室を居場所としている者が多いが、高校生は保健室・相談室といった大人が一人でもいるような場所では居場所とならないため、自分のクラスを居場所としている者が多くなる。「⑤嫌な思いをしたり、ストレスをためた時にいられる場所」については、自分のクラスを居場所としている者が、中学生は少ない。これは、中

学生は自分のクラスの雰囲気をおそらく良くないと感じているものが多いためと考えられる。自分のクラス以外に、小学生は廊下・階段・校庭の片隅・トイレを居場所としている者が多く、中学生は保健室・相談室を居場所としている者が多い。高校生は部室・委員会の場合を居場所としている者が多く、小学生・中学生・高校生それぞれで個人的居場所が異なる。社会的居場所については、年齢段階が上がるにつれて、自分のクラスの使用目的が多様化するため、自分のクラスを居場所とする者が多い。一方、低年齢段階である程、保健室・相談室を居場所とする者が多い傾向がみられた。また、小学生は廊下・階段・校庭の片隅・トイレが社会的居場所にもなっており、中学生は友達がいる他のクラスを居場所としているものが多い。高校生は部室・委員会の場合を居場所としている者が多い。

#### d. 学校における社会的居場所の相手 (図 21)

全体的に、交流相手はほとんどが友達であり、学校において友達は社会的居場所の相手になっている。

年齢段階別に比較すると、年齢段階が上がるに従って、先生とのかわりが減り、友達との関係が強まるということが明らかになった。

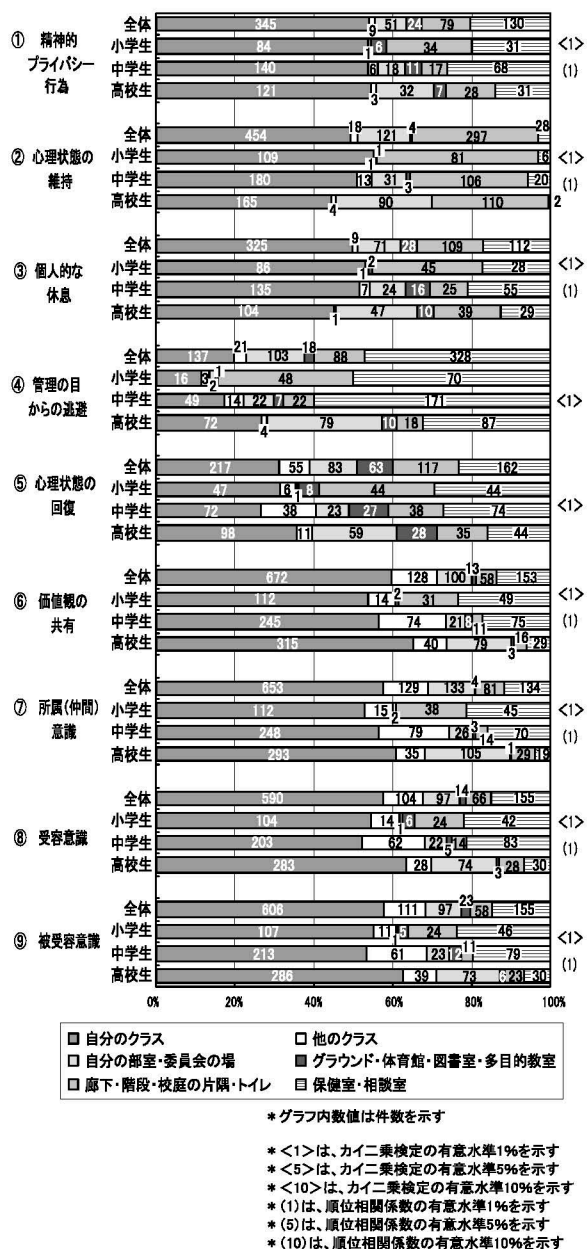


図20 学校における居場所となる具体的な場所

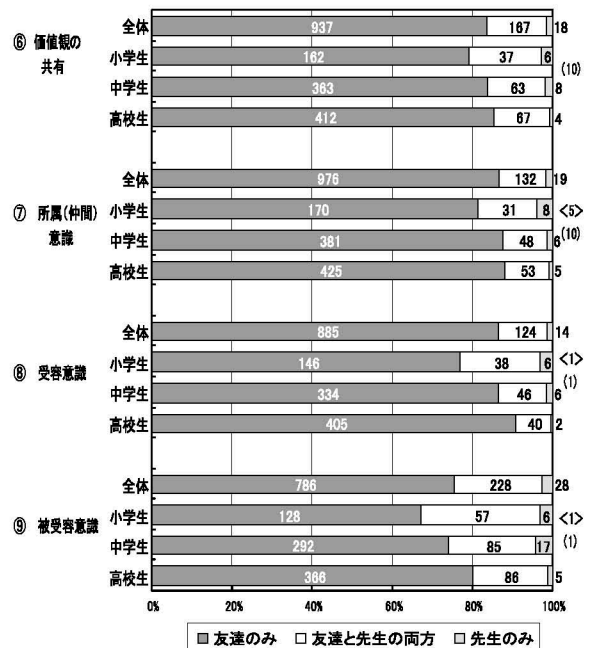


図21 学校における社会的居場所の相手

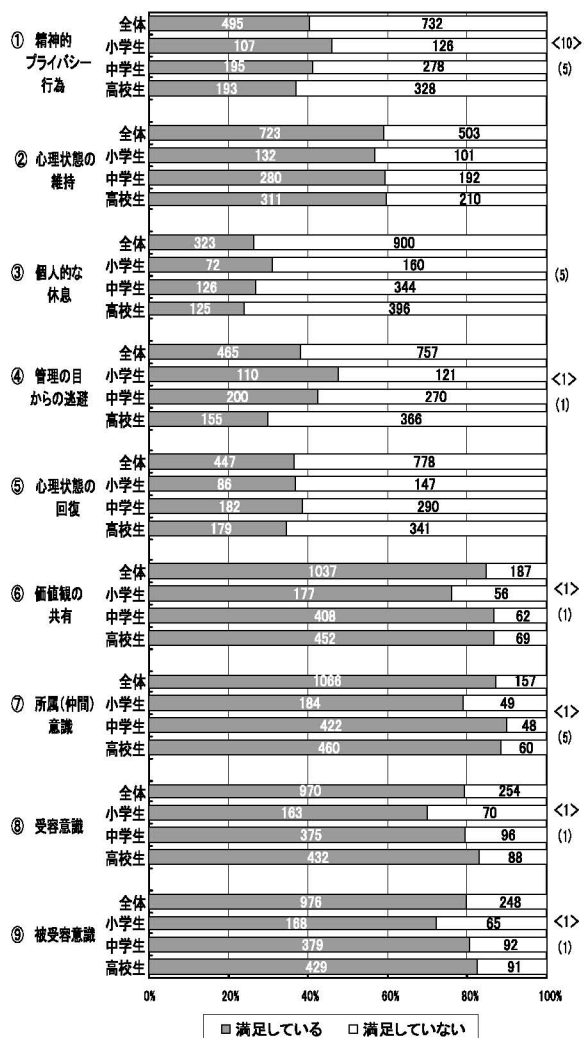
## ② 学校における居場所に対する評価と要求

学校における居場所についての評価と要求を図22と図23に示し、これを検討する。また、居場所の所有率と評価、要求の関係図を、図24と図25に示す。

### a. 学校における居場所に対する評価(図22)

全体的に、個人的居場所については、所有率が高い「②好きなことに集中できる場所」に対する評価は比較的良いが、他の居場所に対する評価は悪い。特に「③一人になってくつろぐことができる場所」に対する評価は最も悪く、学校において十分な個人的居場所を所有することは難しいといえる。社会的居場所については、すべてについて評価は良く、学校は十分な社会的居場所になっているといえる。

年齢段階別に比較すると、個人的居場所については、年齢段階が上がるにつれて評価は悪くなっている。社



\* グラフ内数値は件数を示す

\* <1>は、カイニ乗検定の有意水準1%を示す  
 \* <5>は、カイニ乗検定の有意水準5%を示す  
 \* <10>は、カイニ乗検定の有意水準10%を示す  
 \* (1)は、順位相関係数の有意水準1%を示す  
 \* (5)は、順位相関係数の有意水準5%を示す  
 \* (10)は、順位相関係数の有意水準10%を示す

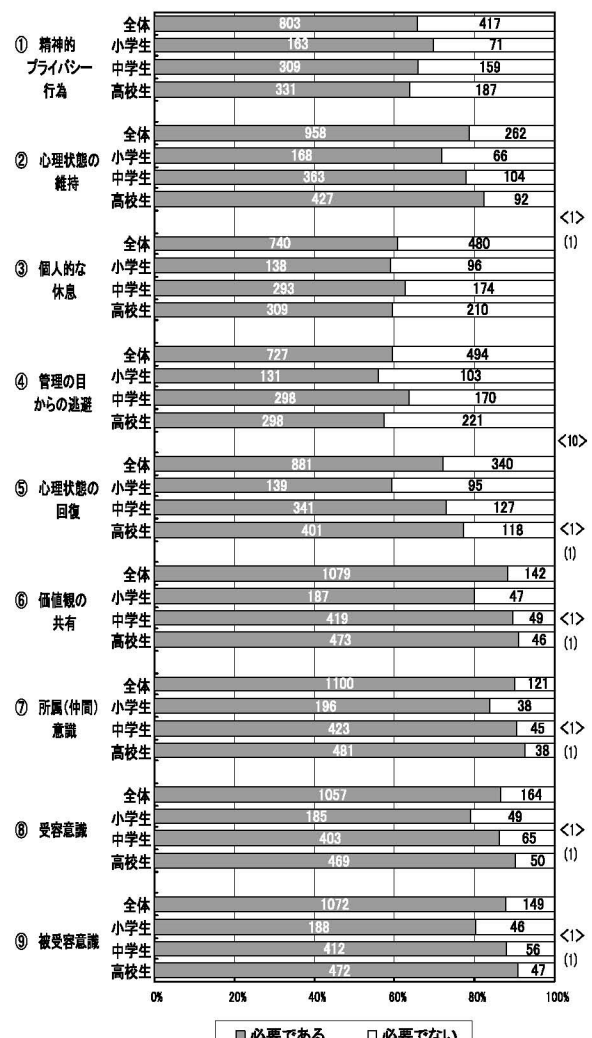
図22 学校における居場所に対する評価

会的居場所については、年齢段階が上がるにつれて、あるいは中学生段階になると、友達との関係が強まるため、評価は高くなることが明らかになった。

### b. 学校における居場所に対する要求(図23)

全体的に、多くの者が個人的居場所を必要としており、社会的居場所はほとんどの者が必要としている。

年齢段階別に比較すると、個人的居場所については、年齢段階が上がるにつれて、「②好きなことに集中できる場所」と「⑤嫌な思いをしたり、ストレスをためた時にいられる場所」に対する要求は高くなる傾向がみられた。また、中学生は「④大人の目を避けられる場所」の要求が高く、必要としている。社会的居場所については、年齢段階が上がるに従って、あるいは中学生段階になると、友達との関係が強まるため、要求が高くなることが明らかになった。



\* グラフ内数値は件数を示す

\* <1>は、カイニ乗検定の有意水準1%を示す  
 \* <5>は、カイニ乗検定の有意水準5%を示す  
 \* <10>は、カイニ乗検定の有意水準10%を示す  
 \* (1)は、順位相関係数の有意水準1%を示す  
 \* (5)は、順位相関係数の有意水準5%を示す  
 \* (10)は、順位相関係数の有意水準10%を示す

図23 学校における居場所に対する要求

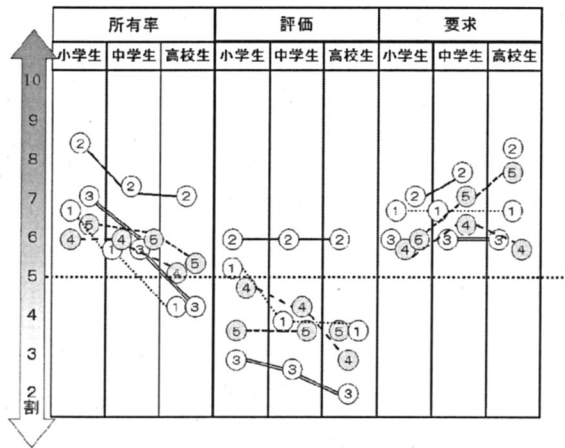


図24 学校における個人的居場所の所有率、評価、要求

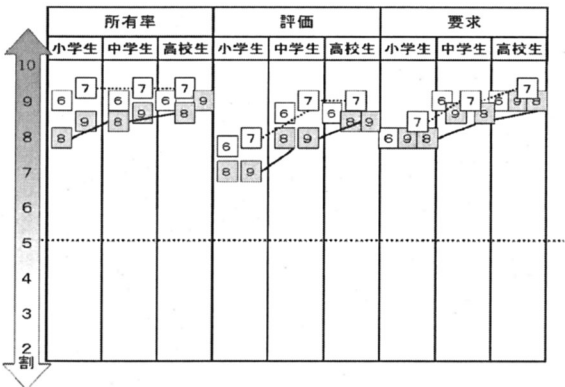


図25 学校における社会的居場所の所有率、評価、要求

#### 4) 年齢段階からみる地域における子どもの居場所 (1) 地域における生活実態

地域における生活実態についての発達段階パターンを表7に示す。

##### ① 地域の雰囲気

全体的に、地域の雰囲気を悪いと感じる者は少なく、ある程度は地域活動や交流が行われている。

年齢段階別に比較すると、低年齢段階である程、地域の雰囲気を良いと感じており、年齢段階が上がるにつれて、地域での交流は少なくなり、地縁の関係が希薄になることが明らかになった。

##### ② 近所付き合い

ほとんどの者が近所付き合いはしているが、深く付き合い合っている者は少ない。

年齢段階別に比較すると、低年齢段階である程、家族ぐるみで付き合いをしており、高校生は挨拶くらいの付き合いである。また、中学生は深い付き合いをしていない者も多く、挨拶さえもしない者が多いことが明らかになった。

##### ③ 地域組織の参加状況

地域組織の参加状況について、「町内の子ども会や

表7 地域における生活実態

項目	内容	発達段階パターン	小中高
雰囲気	活動や交流が時々行われ、仲は悪くない 活動や交流がほとんどなく、よそよそしい	高校生段階発達型	—
	活動や交流が盛んで、仲も良い	年齢段階順発達型	—
近所付き合い	家族ぐるみの付き合い	—	—
	挨拶くらいはする ほとんどない	中学生段階突出型	—
地域組織の参加状況	町内の組織 自主的な組織	中学生段階発達型	—
	趣味的な組織 参加していない	—	—
過ごし方	塾・習い事、図書館に行く 友達の家に行く 友達と過ごす 一人で過ごす	年齢段階順発達型	—
	地域に行かない	高校生段階発達型	—
大切にしている場所 (秘密基地や隠れ家)	よく行く店 自然のあるところ	年齢段階順発達型	—
	友達の家	中学生段階突出型	—
	特になし	年齢段階一定型	—

青年会に参加している」「スポーツの各種少年団やクラブチームなど趣味的な組織に参加している」「子どもだけで作った自主的な集まりに参加している」「参加していない」の選択肢で調査した。

全体的に、8割近くの者が地域組織に参加しておらず、地域への関わりが薄い。また、地域組織に参加している者は、子ども会や青年会といった町内の組織やスポーツクラブなどの趣味的な組織に参加している者が多い。

年齢段階別に比較すると、年齢段階が上がるにつれて、地域組織に参加していない者が多くなり、地域への関わりが弱まることが明らかになった。特に中学生段階になると、町内の組織や子どもたちだけの自主的な組織への参加が少なくなる。

##### ④ 地域における過ごし方

地域での過ごし方について、「塾・習い事に行ったり、図書館で自習する」「友達の家に行く」「友達と店や公園、駅などでぶらぶらする」「一人で店や公園、駅などでぶらぶらする」「家庭、学校以外にはいかない」の選択肢で調査した。

全体的に、塾や習い事、図書館で勉強する者が最も多く、次いで友達の家に行ったり、友達と地域で過ごしたりする者が多い。一方、地域には行かない者も約

1割存在する。

年齢段階別に比較すると、低年齢段階である程、塾や習い事、図書館で勉強する者、友達の家に行く者が多く、行く場所は特定の範囲に限られている。一方、年齢段階が上がるにつれて、友達や一人で店や公園、駅などをぶらぶらする者が多く、行動範囲が広がることが明らかになった。また、高校生段階になると、地域で過ごさない者がやや多くなる傾向がみられた。

#### ⑤ 地域で秘密基地や隠れ家にしている場所

全体的に、多くの者が地域において秘密基地や隠れ家にしている場所は特になく、自然のあるところやよく行く店、友達の家を大切にしている者が1割程度存在する。

年齢段階別に比較すると、低年齢段階である程、自然のあるところを大切にしており、年齢段階が上がるにつれて、よく行く店のような商業施設を大切にしている。また、中学生は友達の家を大切にしており、友達との関わりが強いといえる。

#### ⑥ 地域における居心地の良さを感じる時

地域における居心地の良さを感じる時について、図26に示す。

全体的に、公園や自然のあるところ、友達の家にいる時に居心地の良さを感じており、特定の範囲にいる時に居心地の良さを感じる者が多い。

年齢段階別に比較すると、小学生は公園や自然のあるところ、塾や図書館にいる時に、中学生は友達の家にいる時に居心地の良さを感じている。また、年齢段階が上がるにつれて、行動範囲が広がるため、友達と店や公園、駅などでぶらぶらしている時に居心地の良さを感じており、これらの結果は実態と合致しているといえる。

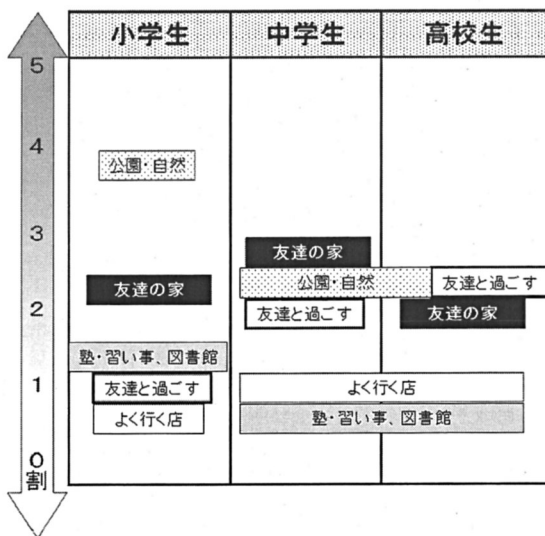


図26 地域における居心地の良さを感じる時

#### ⑦ 地域における人間関係

地域における人間関係について、図27に示す。

全体的に、地域で学校の友達と本音で話し合える者が最も多く、学校の友達は学校だけでなく、地域においても大きな存在であることが明らかになった。一方、大人と本音で話し合える者は少ない。

年齢段階別に比較すると、中学生段階になると、地域でも学校の友達との関わりが強い。さらに高校生段階になると、交友範囲の広がりから学校以外の友達との関わりも強く、また、異性との関係や自主的に関わる関係が強まる。また、低年齢段階である程、親との関わりも関係している親戚との関係が強い。

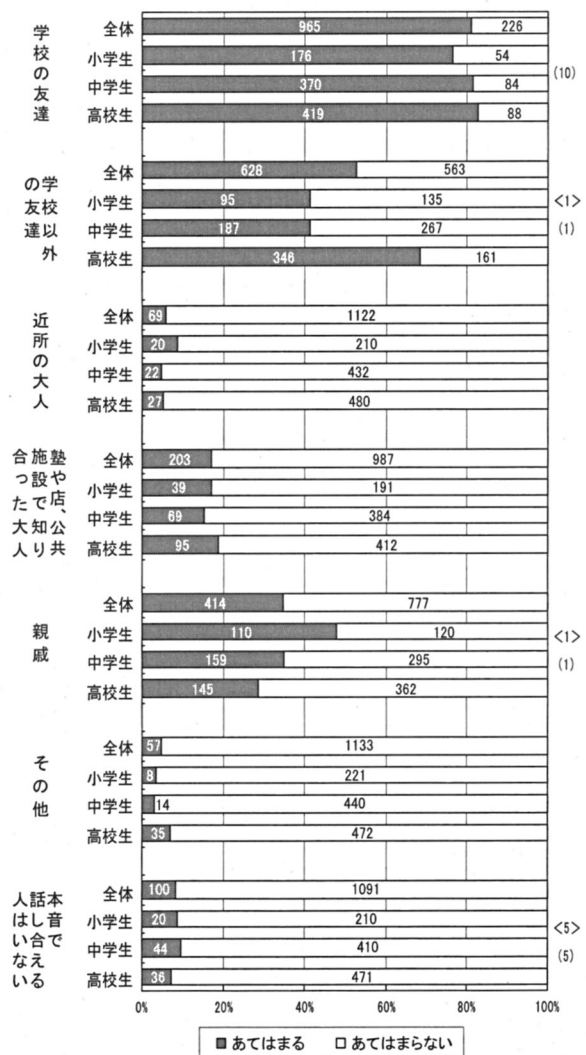


図27 地域における人間関係（本音で話し合える人）

## (2) 年齢段階からみる地域における子どもの居場所

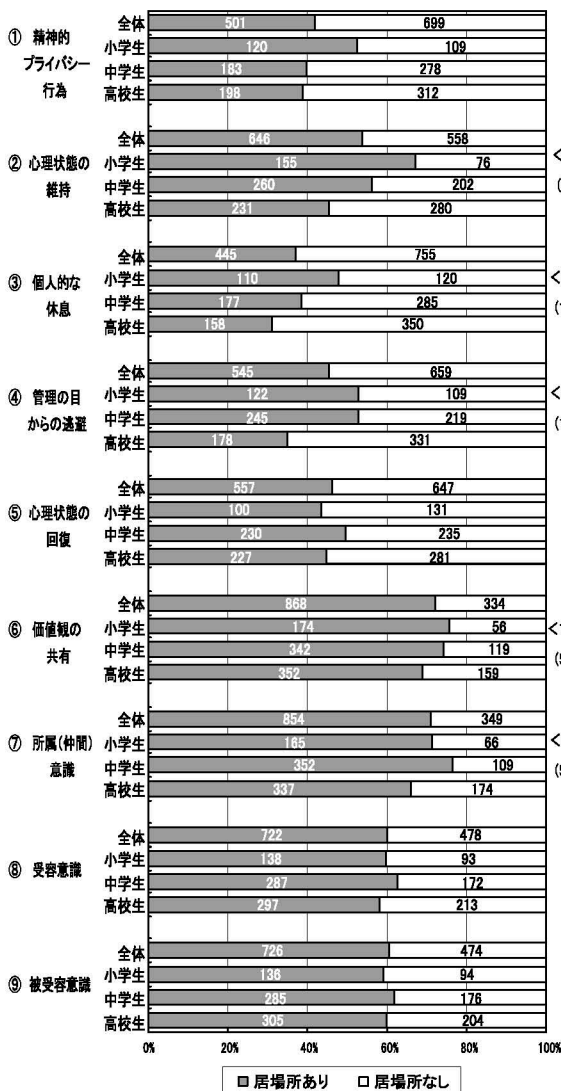
### ① 地域における居場所の実態

地域における居場所の実態を、居場所の所有率、居場所となる具体的な場所、社会的居場所の相手について、図28～図30に示す。

#### a. 地域における居場所の所有率(図28)

全体的に、個人的居場所については、「②好きなことに集中できる場所」を所有している者は過半数とやや多いが、その他の居場所を所有している者は半数以下とやや少ない。社会的居場所については、所有率は高く、特に高次元の居場所より低次元の居場所の所有率が高く、地域は社会的居場所になっている。

年齢段階別に比較すると、低年齢段階である程、所



\* グラフ内数値は件数を示す

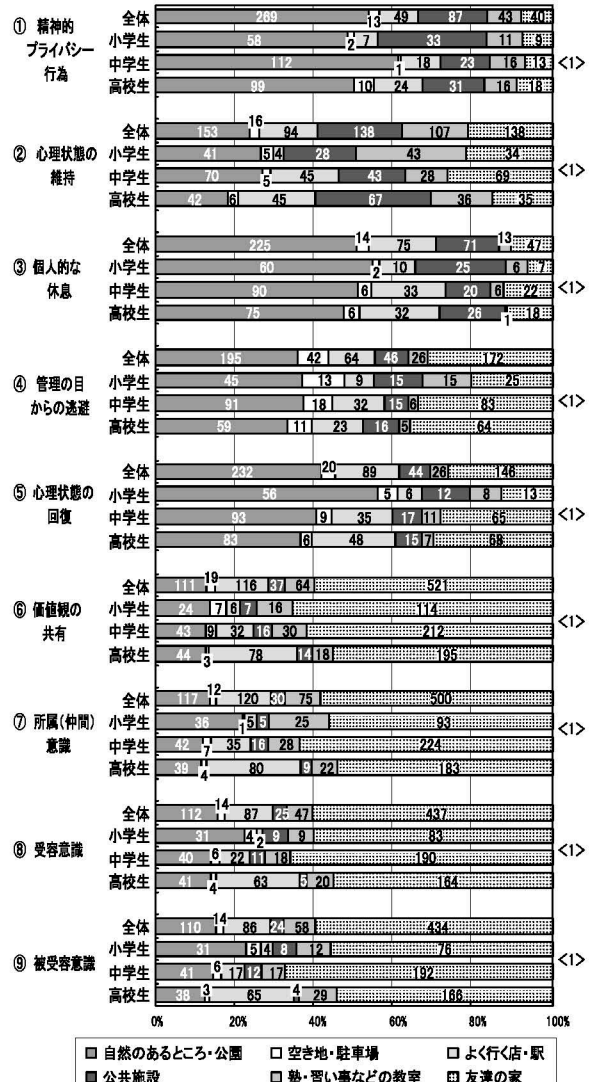
\* <1>は、カイニ乗検定の有意水準1%を示す  
 \* <5>は、カイニ乗検定の有意水準5%を示す  
 \* <10>は、カイニ乗検定の有意水準10%を示す  
 \* (1)は、順位相関係数の有意水準1%を示す  
 \* (5)は、順位相関係数の有意水準5%を示す  
 \* (10)は、順位相関係数の有意水準10%を示す

図28 地域における居場所の所有率

有率が高いことから、地縁の関係が強いため、居場所を所有しやすいと考えられる。また、年齢段階が上がるにつれて、地縁や血縁以外の自主的なつながりを持つため、地縁の関係が弱まり、居住地域に居場所を所有する者は少なくなる。また、中学生は「⑦仲間だと思ふ人と話をする場所」の所有率が高く、友達との関係が強いといえる。

#### b. 地域における居場所となる具体的な場所(図29)

全体的に、地域において個人的居場所の中心となる場所は比較的落ち着ける公園・自然のあるところであり、その他は公共施設、友達の家、塾・習い事、店・駅といった様々な場所が居場所となっている。社会的居場所の中心となる場所は友達の家であり、その他は



\* グラフ内数値は件数を示す

\* <1>は、カイニ乗検定の有意水準1%を示す  
 \* <5>は、カイニ乗検定の有意水準5%を示す  
 \* <10>は、カイニ乗検定の有意水準10%を示す  
 \* (1)は、順位相関係数の有意水準1%を示す  
 \* (5)は、順位相関係数の有意水準5%を示す  
 \* (10)は、順位相関係数の有意水準10%を示す

図29 地域における居場所の具体的な場所

公園・自然のあるところ、店・駅のような友達と行く場所が居場所となっている。一方、公共施設は社会的居場所となっておらず、社会的居場所として利用しにくい場所であることが明らかになった。

年齢段階別に比較すると、個人的居場所において、高校生段階になると、公園・自然のあるところを居場所としている者が少なくなる。また、中学生段階になると、店・駅といった社会的施設や友達の家も個人的居場所となっている。しかし、「②好きなことに集中できる場所」に関しては、高校生は居場所としている者は少ない。また、小学生は塾・習い事が居場所となっている。一方、中学生は公共施設が居場所とはなっておらず、中学生にとって公共施設は利用しにくい場所であるといえる。社会的居場所については、年齢段階が上がるにつれて、行動範囲が広がるため、店・駅を居場所としている者が多く、一方、小学生は公園・自然のあるところといった自然環境を居場所としている者が多い。また、中学生は友達の家を居場所としている者が多く、友達との関わりが強いといえる。

#### c. 地域における社会的居場所の相手 (図 30)

全体的に、交流相手はほとんどが友達であり、地域において友達が社会的居場所の相手になっている。

年齢段階別に比較すると、中学生段階になると地域での交流相手はほとんどが友達であるが、小学生は大人も社会的居場所の相手になっていることが相対的に多い。

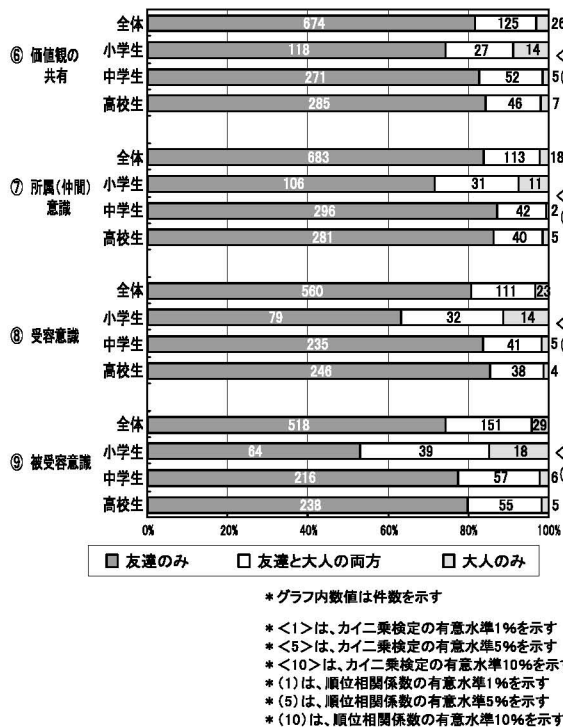


図30 地域における社会的居場所の相手

#### ② 地域における居場所に対する評価と要求

地域における居場所についての評価と要求を図 31 と図 32 に示し、これを検討する。また、居場所の所有率と評価、要求の関係を、図 33 と図 34 に示す。

##### a. 地域における居場所に対する評価 (図 31)

全体的に、居場所に対する評価は悪く、特に個人的居場所の評価は悪い。すなわち、地域に十分な居場所を所有することは難しいといえる。

年齢段階別に比較すると、個人的居場所である「③一人でくつろぐことができる場所」において、中学生段階になると、評価が悪くなり、「④大人の目を避けられる場所」において、年齢段階が上がるにつれて、評価が悪くなることが明らかになった。社会的居場所において違いはみられなかった。

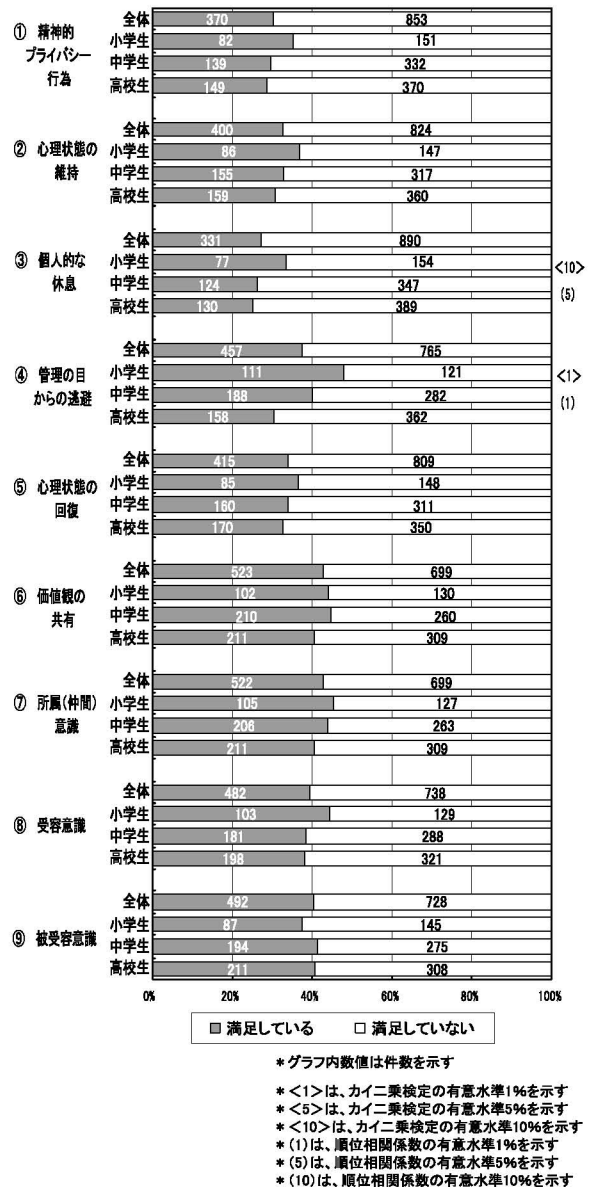


図31 地域における居場所に対する評価

b. 地域における居場所に対する要求 (図 32)

全体的に、地域に個人的居場所も社会的居場所も必要としている者がやや多く、社会的居場所の方をより必要としている。

年齢段階別に比較すると、「⑤嫌な思いをしたり、ストレスをためた時にいられる場所」と社会的居場所において、年齢段階が上がるにつれて、要求が高くなる。すなわち、年齢段階が上がるにつれて、行動範囲が広がり、地縁の関係が弱くなるため、居住地域に居場所は所有していないが、居場所に対する要求は高い。

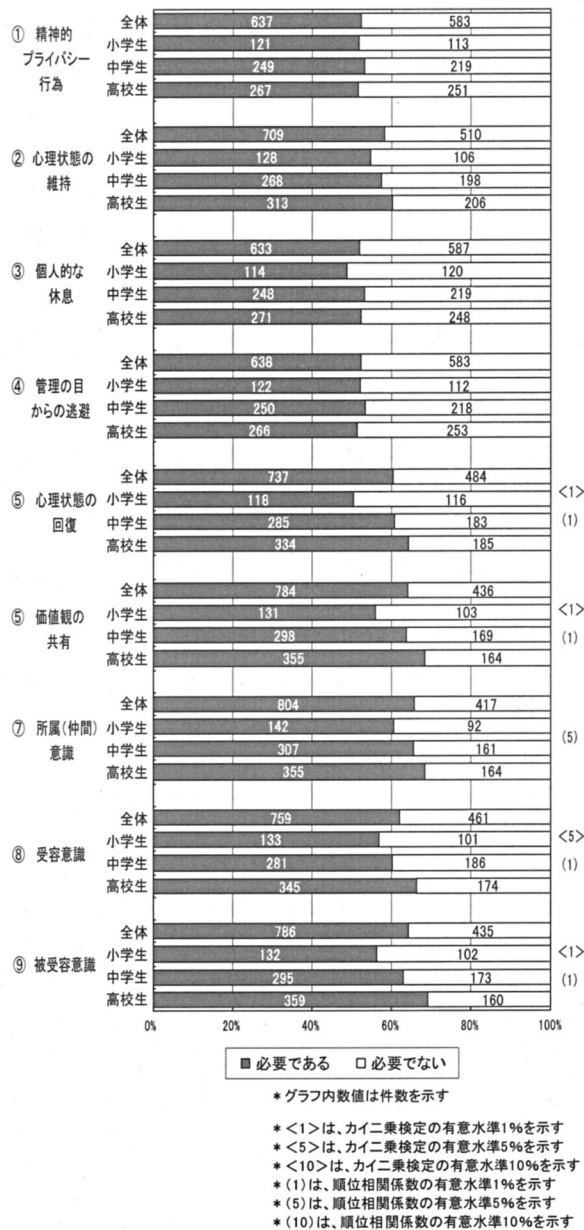


図32 地域における居場所に対する要求

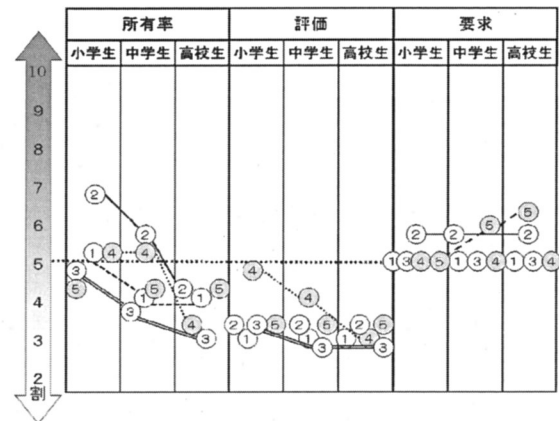


図33 地域における個人的居場所の所有率、評価、要求

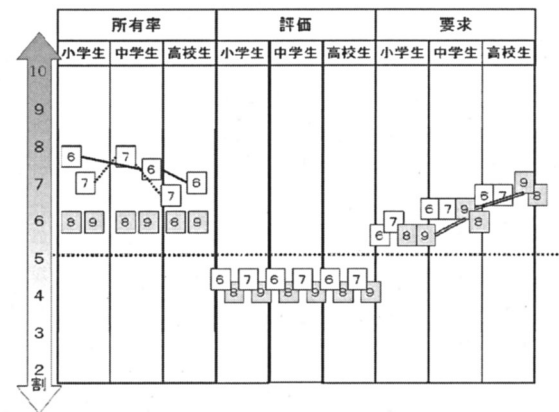


図34 地域における社会的居場所の所有率、評価、要求

5) 家庭・学校・地域全体における子どもの居場所

(1) 家庭・学校・地域比較による子どもの居場所

家庭・学校・地域全体から居場所についてみると、個人的居場所の中心は家庭であるが、専用空間がない学校や地域でも、学校には過半数、地域には4割前後の者が個人的居場所を所有できている。特に「②好きなことに集中できる場所」については、個人的居場所の所有率が全体的に低い学校や地域でも居場所所有率が高く、個人的居場所の中で最も所有しやすい居場所であることが捉えられた。また、社会的居場所の中心は学校であるが、家庭では7割以上、地域では6割以上の者が社会的居場所を所有できていることが明らかになった。

年齢段階別に比較すると、高校生段階になると、専用部屋所有率が高くなるため、家庭に個人的居場所を所有できている、低年齢段階であるほど、家庭に十分な個人的居場所を所有できていないため、学校や地域に個人的居場所を所有していることが捉えられた。社会的居場所について、小学生は、家庭では家族との関係が強く、地域では地縁の関係が強いため、家庭や地域に社会的居場所を所有している。中学生は学校や地

域で友達との関係が強いため、学校や地域に社会的居場所を所有できており、高校生は学校に社会的居場所を所有していることが明らかになった。

## (2) 家庭・学校・地域における居場所所有の相互関係

家庭、学校、地域それぞれにおける居場所所有の関係について検討する。個人的居場所の中心となる家庭に個人的居場所を所有していない場合の、他の場所での居場所の所有状況を図35に示し、社会的居場所の中心である学校に社会的居場所を所有していない場合の、他の場所での居場所の所有状況を図36に示す。これを、居場所の代替型補完ととらえる。

全体的に、代替型補完の状況をみると、家庭に個人的居場所を所有していない者の約半数は、どこにも居場所を所有しておらず、学校や地域で個人的居場所を補完することは難しいと考えられる。そのため、家庭で個人的居場所を所有することは非常に重要であるといえる。学校に社会的居場所を所有していない者は、家庭で社会的居場所を所有している者が多く、家庭は補完の役割が大きいことが明らかになった。

年齢段階別に比較すると、家庭に個人的居場所を所有していない者は、年齢段階が上がるにつれて、個人生活が充実し個人意識も強くなることによってどこかに居場所を求めるため、学校や地域で個人的居場所を

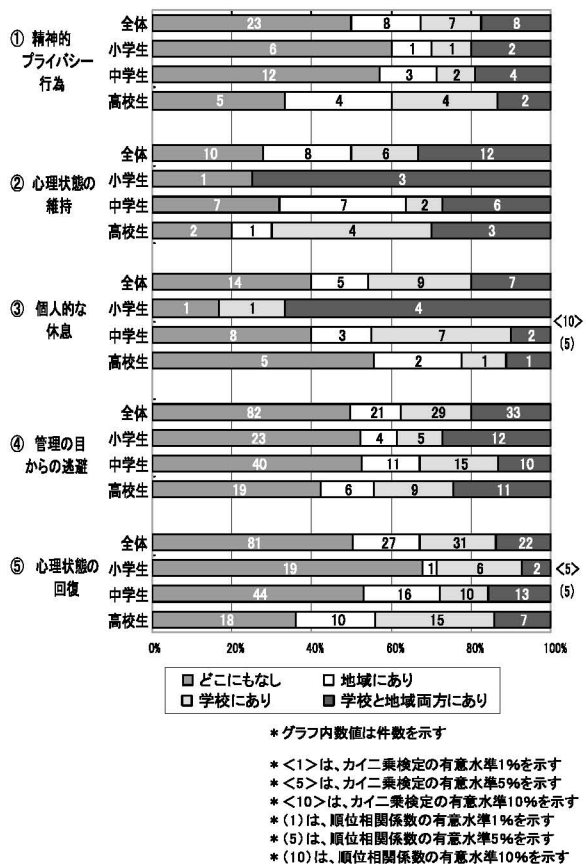


図35 家庭に個人的居場所を所有していない場合の個人的居場所

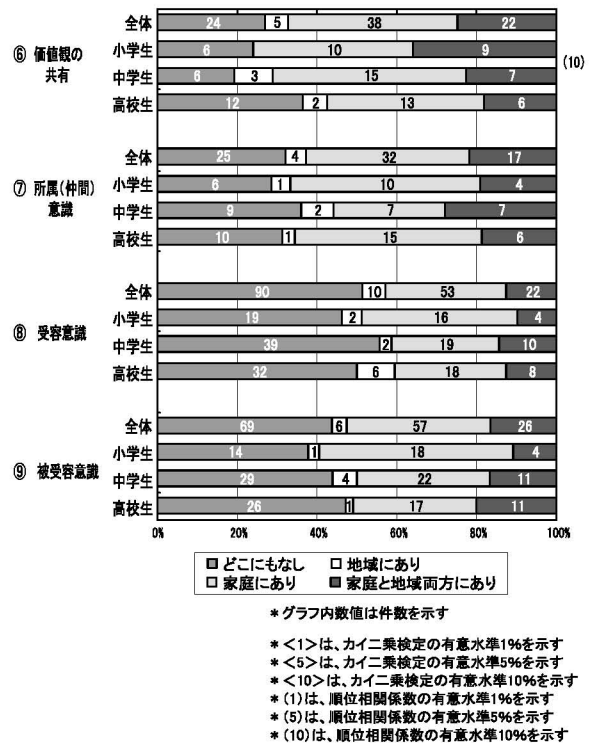


図36 学校に社会的居場所を所有していない場合の社会的居場所

補完している。また、小学生は学校に社会的居場所を所有していない場合、家庭で補完しており、中学生段階になると、家庭での補完はやや難しくなる傾向がみられる。

## 4. 結論

本研究では、年齢段階から家庭・学校・地域の子どものすべての生活場面における「居場所」について検討した結果、以下のことが明らかになった。

### ① 家庭における居場所について

家庭では安定感や安心感などを持つことができ、心理状態が良いことから、家庭・学校・地域の中でも、最も居心地が良いと感じられる場所である。また、家庭には専用部屋のような自由に使える場所があり、個人的居場所の中心となる。そのため、家庭で過ごす時間の中でも、人と交流することより一人で過ごすことに居心地の良さを感じている。特に、高校生は自立に向かい、個人生活が充実してくるため、家庭は個人的居場所としての役割が大きくなる。一方、小学生は居間・食事室で過ごすことが多く、家族との関わりも強い。家庭での交流相手は家族であり、心理状態は特に良く、家庭は社会的居場所としての役割も大きいといえる。また、中学生は自立と依存の間で揺らぐ時期であるため、家族との関係が悪く、心理状態があまり良くない。さらに、心理状態を回復する居場所も所有で

きておらず、家庭における問題点が明らかとなった。また、中学生は家庭での交流相手は友達が多く、友達との関わりが強い。

## ② 学校における居場所について

学校では友達と過ごしたり、部活動をしたりして誰かと過ごすことが多く、多くの人と交流できるため、楽しい場所であり、学校が好きという者が多い。このことから学校は社会的居場所の中心であるといえる。交流相手としては、あまり親密な関係が築けていない先生の存在は薄く、ほとんどの者が本音で会話することができる友達に限定されている。また、多くの人がいる学校において、好きなことに集中できる場所は比較的所有しやすいが、その他の個人的居場所は所有しにくいことが捉えられた。特に、年齢段階が上がるにつれて、個人的居場所の所有率と評価が低くなり、学校において十分な居場所を所有できていないが、要求はかなり強く、学校における問題点が明らかとなった。一方、小学生は要求レベルも低いため、学校でも比較的個人的居場所を所有できている。また、中学生は部活動をしている者が多く、放課後や休日にも部活動をしており、学校のウエイトが大きい。さらに、保健室・相談室を活用しており、保健室・相談室は個人的居場所となっている。高校生は部活動をしている者はやや少なくなるが、部活動をしている者は居心地の良さを感じており、また、部室を比較的自由に使えるため、部室が居場所となっている。また、部活動など自主的な活動をしている者は、学校で満足感を得られている。

## ③ 地域における居場所について

地域については、個人的居場所、社会的居場所ともに、家庭や学校に比べて、全体的に居場所の所有率が低く、居場所に対する評価も低いが、要求はかなり存在する。また、社会的居場所の中心は友達の家が多く、友達との関係が希薄な者は地域における居場所の所有は難しく、また、公共施設の利用が少ないという地域における問題点が明らかとなった。特に、中学生は公共施設を居場所としている者が少なく、地域における居場所づくりが不十分であるといえる。年齢段階が上がるにつれて、地縁や血縁の関係が希薄になり、友達と行動するようになる。さらに、高校生段階になると、地域での単独行動が多くなり、居住地域圏外へと行動範囲が広がるが、居場所の所有には至っていない。一方、低年齢段階である程、行動範囲が狭く、公園や自然のあるところ、友達の家が居場所となっていることが明らかになった。

## ④ 家庭・学校・地域全体における居場所について

家庭・学校・地域全体から居場所の所有率についてみると、個人的居場所の中心は家庭であり、社会的居場所の中心は学校である。専用部屋所有率が高く、個

人意識も強い高校生は家庭に個人的居場所を所有できている。一方、家庭に高次元の個人的居場所を所有できていない小学生と中学生は学校や地域に個人的居場所を所有しているが、評価は低く、十分な居場所ではないといえる。また、社会的居場所について、中学生段階になると、学校で過ごすことが多くなり、学校に居場所を所有している。また、中学生は友達の家が居場所となっており、地域においても社会的居場所を所有している。一方、小学生は家庭中心の生活であり、家族との関係も良いため、家庭に社会的居場所を所有していることが捉えられた。

代替型補完構造については、学校や地域で個人的居場所を補完することは難しいため、家庭で個人的居場所を所有することは非常に重要である。社会的居場所については、家庭は学校における社会的居場所の補完の役割が大きいといえるが、地域は補完の役割が十分でなく、地域に社会的居場所を提供することが必要である。

年齢段階が上がるにつれて、家庭に個人的居場所を所有していない者は学校や地域で個人的居場所を補完している。また、小学生は学校に社会的居場所を所有していない場合でも、家庭で補完しているが、中学生段階になると、家庭での補完はやや難しくなる傾向がみられる。

以上より、年齢段階によって「居場所」の実態に違いがみられた。年齢段階が上がるにつれて、個人生活が充実に向かい、自立度が高まるため、家庭での個人的居場所の役割は大きくなる。しかし、中学生は家庭での居場所所有が十分でなく、心理状態も悪いため、家庭以外の場所での居場所が必要であると考えられる。また、学校では年齢段階が上がるにつれて、個人的居場所の所有率が低く、評価が悪いことから、十分な居場所所有に至っていないことが捉えられた。しかし、個人的居場所に対する要求は高く、特に中高生には学校において個人的居場所となり得るような、リフレッシュルームや多目的室といった自由に使用できる空間の提供、充実化が必要であると考えられる。一方、居住地域では友達の家が社会的居場所の中心となっており、友達との関係が希薄な者は居場所所有は困難である。また、公共施設の利用が少ないことが問題点として明らかとなった。特に、中学生は公共施設の利用が少なく、行政の地域における居場所づくりは不十分であるといえる。また、年齢段階が上がるにつれて、地域に居場所を所有している者は少ないが、要求は高い。そのため、地域での居場所づくり、地域における活動や交流による関係づくりが重要であると考えられる。

注

- 1) たとえば、＜社会学・教育学系＞では、  
中村一茂「高校生の「居場所」を構成する心理的要因に関する調査研究」、東洋大学大学院紀要 43、2006 年  
渡辺弥生、小高佐友里「高校生における「居場所」としての学校の認知について」、法政大学文学部紀要 53、2006 年  
斎藤富由紀「大学生および高校生における心理的居場所感尺度作成の試み」、千里金蘭大学紀要、2007 年  
川崎夫佐子、高橋知音「教室不適応の生徒に対応する居場所の機能」、信州大学教育学部紀要 120、2008 年  
杉本希映、庄司一子「スクールカウンセラーによる不登校生徒に対する支援―「居場所環境」という視点からの考察」、筑波教育学研究第 9－6 巻、2008 年  
＜建築学・住居学系＞では、  
斎尾直子、長谷夏哉「こどもたちの放課後の居場所づくりに関する研究」、日本建築学会計画系論文集 No.614、2007 年  
木下誠一、池谷辰仁、今井正次「中高生の「居場所」の成立条件に関する研究」、日本建築学会計画系論文集 No.623、2008 年  
木下誠一、矢部亮、今井正次「居場所としての公共施設のあり方に関する研究」、日本建築学会計画系論文 No.628、2008 年  
などがみられる。
- 2) 中島喜代子、倉田英理子「家庭、学校、地域における子どもの居場所」、三重大学教育学部研究紀要 第 55 巻、2004 年  
中島喜代子、小長井明美、木屋真依「世代間比較からみた子どもの居場所に関する研究―個人的居場所の場合―」、三重大学教育学部研究紀要 第 57 巻、2006 年  
中島喜代子、廣出円「居住環境からみる子どもの居場所に関する研究」、三重大学教育学部研究紀要 第 59 巻、2008 年
- 3) 居場所の定義と居場所の分類について、詳しくは下記を参照されたい。  
中島喜代子、木屋真依、小長井明美「「居場所」の分類と理論的枠組み」、家庭科教育 第 79 巻 3 号、2005 年  
中島喜代子、廣出円、小長井明美「「居場所」概念の検討」、三重大学教育学部研究紀要 第 58 巻、2007 年